

Oracle® Database

Companion CD インストレーション・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-bit)

部品番号 : B25257-03

2007 年 5 月

Oracle Database Companion CD インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-bit)

部品番号 : B25257-03

原本名 : Oracle Database Companion CD Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-Bit)

原本部品番号 : B14324-03

原本著者 : Anita Antonysamy

原本協力者 : Patricia Huey, Janelle Simmons, Reema Khosla, Punsri Abeywickrema, Eric Belden, Phil Choi, Toby Close, Sudip Datta, Jim Emmond, David Friedman, Alex Keh, Mark Kennedy, Peter LaQuerre, Rich Long, Anu Natarajan, Mark MacDonald, Matt McKerley, Mohamed Nosseir, Bharat Paliwal, Sham Rao Pavan, Hanlin Qian, Christian Shay, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Ravi Thammaiah, Sujatha Tolstoy, Alice Watson, and Vinisha Dharamshi

Copyright © 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性あります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
ドキュメントのアクセシビリティについて	viii
関連ドキュメント	ix
表記規則	ix
サポートおよびサービス	x
 Windows Vista への対応サポート	xi
Windows Vista のユーザーアカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理	xii
 1 Oracle Database Companion CD インストールの概要	
インストール・プロセスの概要	1-2
Oracle HTML DB のみインストール・タイプでインストールされる製品	1-3
Oracle HTML DB	1-3
Oracle HTTP Server	1-3
Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品	1-4
Oracle JDBC Development Drivers	1-4
Oracle SQLJ	1-5
Oracle Database Examples	1-5
必須製品	1-5
Oracle Text のナレッジ・ベース	1-5
Oracle Workflow Server	1-6
Oracle Ultra Search	1-6
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ	1-7
JPublisher	1-7
Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品	1-8
Oracle Workflow 中間層コンポーネント	1-8
Oracle HTTP Server	1-8
 2 Oracle Database Companion CD の要件	
Oracle HTML DB 製品の要件	2-2
Oracle HTML DB 要件	2-2
要件の概要	2-2
ディスク領域要件	2-3
ブラウザの要件	2-3
Oracle Database の要件	2-3
Oracle HTTP Server の要件	2-4

Oracle XML DB の要件	2-4
Oracle Text の要件	2-4
Requirements for Oracle Database 10g Products	2-5
要件の概要	2-5
ディスク領域要件	2-5
Oracle Database の要件	2-6
Oracle Workflow Server のブラウザ要件	2-6
Oracle Workflow Server の製品要件	2-6
Oracle Database 10g Companion Products の要件	2-6
要件の概要	2-7
ディスク領域要件	2-8
ブラウザの要件	2-8
Oracle Workflow Server の要件	2-9
Oracle HTTP Server の要件	2-9
Companion Products とともに提供される Oracle HTTP Server	2-9
既存の Oracle HTTP Server インストールの使用	2-10
ハードウェアおよびソフトウェア要件	2-11
Windows Telnet サービスのサポート	2-11
Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート	2-11
Oracle Database Companion CD のネットワークに関するトピック	2-12
DHCP コンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール	2-12
複数の IP アドレスを持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD の インストール	2-12
複数の別名を持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール	2-13
ループバック・アダプタのインストール	2-13
ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック	2-14
Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール	2-14
Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール	2-16
Windows Vista でのループバック・アダプタのインストール	2-17
ループバック・アダプタの削除	2-18

3 Oracle Database Companion CD ソフトウェアのインストール

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順	3-2
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-2
ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー	3-3
リモート DVD ドライブからのインストール	3-3
リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有	3-3
ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング	3-4
リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール	3-4
ハード・ドライブからリモート・コンピュータへのインストール	3-5
リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール	3-5
Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール	3-5
Oracle HTML DB のインストール前の推奨作業	3-5
Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server の Oracle ホームの位置	3-6
Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール手順	3-6
Oracle Database 10g Products のインストール	3-9
Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置	3-9
Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別	3-9

Oracle Database 10g Products のインストール手順	3-10
Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備	3-11
Oracle Database 10g Companion Products のインストール	3-15
Oracle Database 10g Companion Products の Oracle ホームの位置	3-15
Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストール手順	3-15
Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除	3-18
Oracle データベースからの Oracle HTML DB の削除	3-18
Oracle Workflow の削除	3-18
Oracle Database Products および Oracle Database Companion CD 製品の削除	3-19

4 Oracle Database Companion CD インストール後の作業

最新のパッチ・セット・リリースのインストール	4-2
Oracle HTTP Server のインストール後の作業	4-3
ファイルのバックアップ	4-3
以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行	4-3
以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行	4-3
手順 1: httpd.conf ファイルをコピーして開く	4-4
手順 2: 一括変更を実行する	4-4
手順 3: LoadModule のディレクティブ・リストを変更する	4-4
手順 4: サポートされない機能のディレクティブとセクションを削除する	4-5
手順 5: ポート番号を変更する	4-5
手順 6: 既存のセクションとディレクティブを変更する	4-6
手順 7: 新規のセクションとディレクティブを追加する	4-6
手順 8: サーバー証明書と秘密鍵を移行する	4-7
手順 9: Secure Socket Layer セクションとディレクティブの変更	4-8
手順 10: 必須ファイルを新規ディレクトリにコピーまたは移動する	4-9
mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行	4-9
Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化	4-10
Oracle HTML DB のインストール後の作業	4-10
プロセスの再起動	4-10
Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成	4-11
Oracle HTTP Server リリース 9.0.3	4-11
Oracle HTTP Server 10g リリース 1	4-11
PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化	4-12
新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化	4-12
Oracle HTML DB のアップグレードでのパスワードの不明瞭化	4-12
リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成	4-12
htmldbca の実行要件	4-13
htmldbca の構文	4-13
htmldbca の実行	4-15
Oracle Workflow Server のインストール後の作業	4-15
初期化パラメータの値の確認	4-16
無効なオブジェクトのコンパイル	4-16
Oracle Workflow HTML のヘルプの構成	4-16
その他の設定作業の完了	4-17

5 Oracle Database Companion CD 製品のスタート・ガイド

インストール内容のチェック	5-2
Oracle HTTP Server のスタート・ガイド	5-2
Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動	5-2
Oracle HTTP Server へのログイン	5-2
Oracle HTML DB のスタート・ガイド	5-3
Oracle HTML DB へのログイン	5-3
Oracle HTML DB 管理者の設定作業	5-4
Oracle Workflow のスタート・ガイド	5-4
Oracle Workflow のホームページへのログイン	5-4
Oracle Workflow Manager へのログイン	5-5
Oracle Workflow 管理者の設定作業	5-6
Oracle Ultra Search のスタート・ガイド	5-6

A Java Access Bridge のインストール

概要	A-2
JRE 1.4.2 の設定	A-2
インストール済の Oracle コンポーネントの設定	A-2
Java Access Bridge のインストール	A-2
Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成	A-3

B レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール

レスポンス・ファイルの使用方法	B-2
サイレントまたは非対話型モードを使用する理由	B-3
レスポンス・ファイルの一般的な使用手順	B-3
レスポンス・ファイルの準備	B-4
レスポンス・ファイル・テンプレートの編集	B-4
レスポンス・ファイルの記録	B-5
レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行	B-6
非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行	B-7

C Oracle Database Companion CD グローバリゼーション・サポートの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用	C-2
他の言語での Oracle HTML DB のインストール	C-2
他の言語での Oracle Workflow のインストール	C-3
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	C-3
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	C-4
NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成	C-5

D Oracle Companion CD のポート番号の管理

ポートの管理	D-2
ポート番号とアクセス URL の表示	D-2
Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル	D-3
Oracle HTTP Server ポートの変更	D-4
Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更	D-4
Oracle Ultra Search ポートの変更	D-5

E Oracle Database Companion CD のインストールに関するトラブルシューティング

要件の確認	E-2
インストール・セッションのログの確認	E-2
Oracle Companion CD インストール・セッションのログの確認	E-2
Oracle HTML DB インストール・セッションのログの確認	E-2
インストール失敗後のクリーン・アップ	E-3
Oracle Companion CD インストール失敗後のクリーン・アップ	E-3
Oracle HTML DB インストール失敗後のクリーン・アップ	E-3
アップグレード失敗後のクリーン・アップ	E-4
新しいインストール失敗後のクリーン・アップ	E-4
サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理	E-4
Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合	E-5
Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合	E-5

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows に含まれている製品のインストールおよび設定方法について説明します。このマニュアルでは、Windows Server 2000、Windows Server 2003、Windows XP Professional および Windows Vista オペレーティング・システムにインストールした Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

対象読者

『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』は、Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows に含まれている次の製品のインストールを行うユーザーを対象としています。

- Oracle Workflow サーバーおよび Oracle Workflow 中間層コンポーネント
- Oracle HTML DB
- Oracle HTTP Server
- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- Oracle Database Examples
- JPublisher
- ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
- Oracle Text のナレッジ・ベース
- Oracle Ultra Search

このマニュアルを使用するにあたっては、Oracle Database がインストールされているコンピュータに対する管理者権限と、オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概要に関する知識が必要です。

関連項目：デフォルトの設定を使用してクイック・インストールを実行する場合は、『Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド』を参照してください。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database リリース・ノート』
- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database Client インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database 概要』

Oracle のエラー・メッセージについては、『Oracle Database エラー・メッセージ』を参照してください。Oracle のエラー・メッセージの説明は、HTML 形式でのみ提供されています。Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のオンライン・ドキュメント・ライブラリにアクセスすると、エラー・メッセージを範囲ごとに参照できます。インターネットに接続している場合は、Oracle オンライン・ドキュメントの Oracle メッセージ検索機能を使用して、目的のエラー・メッセージを検索できます。

このマニュアル内の多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用しています。

規則	意味
太字	太字は、処理に関連付けられているグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) 要素、または本文中や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル・コード、画面に表示されるテキストまたはユーザーが入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Windows Vista への対応サポート

Oracle Database は 10.2.0.3 以降が Windows Vista でサポートされています。Oracle Technology Network のサイトで入手可能な Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.3) for Microsoft Windows Vista メディアパックを使用します。Windows Vista に Oracle Database をインストールする際は、Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows のメディアを使用しないでください。

注意： Oracle HTTP Server および Oracle Workflow は Windows Vista でサポートされていません。

Windows Vista のユーザーアカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理

信頼できるアプリケーションのみをコンピュータ上で実行するために、Windows Vista ではユーザーアカウント制御が提供されています。このセキュリティ機能を有効にすると、設定次第で Oracle Database Client をインストールする際に Oracle Universal Installer から同意や認証情報を要求されます。適宜、同意や Windows の Administrator の認証情報の入力を行います。

データベース・コンフィギュレーション・アシスタント、Net コンフィギュレーション・アシスタント、および opmnctl のようなオラクル社の一部ツールを使用したり、Oracle ホーム内のディレクトリに書き込みを行うツールやアプリケーションを実行するには Administrator 権限が必要になります。ユーザーアカウント制御を有効にし、ローカルの Administrator としてログインすると、これらの各コマンドを通常の方法で正常に実行できます。ただし Administrator グループのメンバーとしてログインする場合は、Windows の Administrator 権限でこれらのタスクを明示的に呼び出す必要があります。

関連項目： 詳細は、Oracle Database のプラットフォーム・ガイドの Windows Vista でのデータベース・ツールの起動に関する項を参照してください。

Windows の Administrator 権限で Windows ショートカットを実行する手順：

1. 「スタート」ボタンをクリックします。
2. 「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」を選択します。
3. コマンド名または実行するアプリケーションを右クリックして「Run as administrator」を選択します。

Windows の Administrator 権限でコマンド・プロンプト・ウィンドウを起動する手順：

1. Windows Vista のデスクトップ上にコマンド・プロンプト・ウィンドウのショートカットを作成します。デスクトップにショートカットのアイコンが表示されます。
2. 新規作成したショートカットのアイコンを右クリックして「Run as administrator」を指定します。

ウィンドウをオープンすると、タイトル・バーには「Administrator: コマンドプロンプト」と表示されます。このウィンドウ内で実行するコマンドは Administrator 権限で実行されます。

Oracle Database Companion CD インストールの概要

この章では、Oracle Database Companion CD に含まれている製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

- インストール・プロセスの概要
- Oracle HTML DB のみインストール・タイプでインストールされる製品
- Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品
- Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品

インストール・プロセスの概要

インストール・プロセスは、次の 6 段階で構成されます。

1. **リリース・ノートの確認**: インストールを開始する前に Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のリリース・ノートを一読してください。プラットフォーム固有のマニュアルに加え、リリース・ノートを利用します。最新版のリリース・ノートは、次の Oracle Technology Network の Web サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/documentation>

2. **インストールの計画**: この章では、各インストール・タイプの製品と、ソフトウェアのインストール前に知っておく必要のある情報を提供します。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』の付録 A 「インストールに関してよくある質問」も参照できます。この付録では、サイト要件に応じた Oracle 製品の最適のインストール方法が提案されています。

3. **システム要件の確認**: 第 2 章では、ソフトウェアをインストールする前にシステムで満たす必要がある最低要件について説明します。
4. **ソフトウェアのインストール**: 次の項を参照して、Oracle Database Companion CD の製品をインストールします。
 - 第 3 章では、Oracle Universal Installer を使用したソフトウェアのインストール方法について説明します。
 - 付録 A では、Java Access Bridge のインストール方法について説明します。Java Access Bridge により、Oracle の各コンポーネントでのスクリーン・リーダーの使用が可能になります。
 - 付録 B では、レスポンス・ファイルを使用したサイレントまたは非対話型モードでのインストールの実行方法について説明します。Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの非対話型モードでの実行方法についても説明します。
 - C-2 ページの「異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用」では、Oracle Database Companion CD コンポーネントを別の言語でインストールおよび使用する方法について説明します。
 - 付録 E では、インストールのトラブルシューティングに関する情報を示します。
5. **インストール後の作業**: 第 4 章では、インストール後に推奨される作業および必要な作業について説明します。
6. **Companion CD 製品の使用開始**: 次の項を参照して、Oracle Database Companion CD 製品の使用を開始します。
 - 第 5 章では、インストール内容の確認方法、インストールした製品の起動方法およびインストールした製品のログイン方法など、Oracle Database Companion CD 製品のインストール後の操作およびインストール後に必要な手順について説明します。
 - C-5 ページの「NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成」では、Oracle Database Companion CD のロケールおよびキャラクタ・セットの構成方法について説明します。
 - 付録 D では、ポート番号の確認および変更方法について説明します。

Oracle HTML DB のみインストール・タイプでインストールされる製品

次の各製品は、Oracle HTML DB のみインストール・タイプでインストールできます。

- [Oracle HTML DB](#)
- [Oracle HTTP Server](#)

注意： Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウには、Oracle HTML DB のみインストール・タイプでインストールされる製品の詳細なリストが表示されます。

Oracle HTML DB

Oracle HTML DB は、Oracle データベースで Web アプリケーションを迅速に開発およびデプロイするためのツールです。開発者にとっては、デスクトップ・データベースの生産性と Oracle データベースのセキュリティ、信頼性およびパフォーマンスが得られます。既存の表、ビューまたはスプレッドシートからのインポート・データに関して、わずかなプログラミングまたはスクリプト記述と Web ブラウザのみで、レポート・アプリケーションやデータ入力アプリケーションを作成できます。

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Apache Standalone バージョン 10.2.0.0 をベースとする Web サーバーです。Oracle HTML DB のみインストール・タイプを使用して、新しい Oracle ホームに Oracle HTTP Server をインストールできます。（Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールしている場合は、Oracle HTTP Server と Oracle Database 10g Companion Products を併用できます。）このスタンドアロン・リリースの Oracle HTTP Server には、次の機能が用意されています。

- Web ページの提供に使用できる堅牢で信頼性の高い Web サーバー
- mod_perl および mod_fastcgi を使用した Perl および Fast CGI スクリプトのサポート
- mod_plsql を使用した PL/SQL アプリケーションのサポート
- Oracle Process Manager and Notification サーバー（OPMN）の使用による高可用性
OPMN は Oracle HTTP Server プロセスを監視し、障害の発生時に再起動します。
- Secure Sockets Layer（SSL）を使用したセキュアなトランザクションのサポート
- mod_ossso を使用したシングル・サインオン機能

シングル・サインオン機能を有効化するには、Oracle HTTP Server とともに Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server を使用する必要があります。これらは両方とも Oracle Application Server 10g と併用できます。

- オラクル社が提供するモジュールのみでなく多数の標準 Apache モジュール

関連項目： Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server の詳細は、『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品

次の各製品は、Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールできます。

- [Oracle JDBC Development Drivers](#)
- [Oracle SQLJ](#)
- [Oracle Database Examples](#)
- [Oracle Text のナレッジ・ベース](#)
- [Oracle Workflow Server](#)
- [Oracle Ultra Search](#)
- [ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ](#)
- [JPublisher](#)

注意：

- Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウでは、Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品の詳細リストが示されます。
 - Oracle Database では、現在、Legato Single Server Version (LSSV) をサポートしていません。バックアップおよびリカバリ・ツールの Oracle Database Recovery Manager (RMAN) が Oracle Database に統合されました。RMAN の詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。
-

Oracle JDBC Development Drivers

Oracle には、コードのデバッグおよび他のデプロイ計画に使用できる一連の JDBC ドライバが用意されています。これらのドライバは Oracle Database リリース 8.1.7 以上にアクセスできます。

関連項目：

- Oracle JDBC ドライバおよび Oracle Call Interface の詳細は、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/index.html>) を参照してください。
- 『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』

Oracle SQLJ

Oracle SQLJ によりアプリケーション・プログラムは Java 設計哲学と対応する方法で Java コードに SQL 操作を埋め込むことができます。SQLJ プログラムとは、埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムです。Oracle SQLJ では、事前定義されていない動的 SQL 操作をサポートする拡張機能が提供されています。その操作はリアルタイムで変更できます。動的 SQL 操作は、SQLJ アプリケーション内の JDBC コードまたは PL/SQL コードを介して使用することもできます。一般的なアプリケーションでは、動的 SQL よりも静的 SQL のほうが広く使用されています。SQLJ はトランスレータおよびランタイム・コンポーネントの両方で構成され、スムーズに開発環境に統合されます。

Oracle Database Examples

Oracle Database Examples には、Oracle Database の製品、オプションおよび機能の習得に使用できる多様な例と製品デモが含まれています。これらの例の多くは、Oracle Database にオプションでインストールできるサンプル・スキーマと連動するように設計されています。Oracle オンライン・ドキュメント・ライブラリにあるマニュアルの多くは、Oracle Database Examples で提供されるサンプル・プログラムおよびスクリプトを使用しています。

必須製品

Oracle Database Examples を使用するためには、Oracle Database にサンプル・スキーマをインストールする必要があります。データベースの作成時にサンプル・スキーマを組み込むかどうかは、Oracle Database をインストールするとき、またはデータベース・コンフィギュレーション・アシスタント (DBCA) を使用して新規データベースを作成するときに選択できます。また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールすることもできます。

関連項目： サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールする方法は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

Oracle Text のナレッジ・ベース

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでは、2 つの Oracle Text ナレッジ・ベース（英語とフランス語）がインストールされます。提供されるナレッジ・ベースは、要件に応じて拡張できます。あるいは、英語とフランス語以外の言語で独自のナレッジ・ベースを作成できます。

関連項目： ナレッジ・ベースの作成および拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。

Oracle Workflow Server

Oracle Workflow では、ビジネス・プロセスベースの統合をサポートする完全なワークフロー管理システムを提供します。そのテクノロジーによって、ユーザー定義のビジネス・ルールに応じてあらゆる種類の情報をルーティングし、ビジネス・プロセスのモデリング、自動化および継続的改善が可能になります。Oracle Workflow インストールには、Oracle Database Products インストール・タイプの場合は Oracle Workflow Server と Oracle Workflow Manager が、Companion Products インストール・タイプの場合は Oracle Workflow 中間層コンポーネントが含まれます。

このリリースでは、Oracle Workflow Manager の Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) インスタンスの起動で、2 つのスクリプトが実行されるように簡素化されました。

注意： Oracle E-Business Suite データベースには Oracle Workflow Server をインストールしないでください。Oracle Database 10g に含まれる Oracle Workflow のバージョン、またはこのバージョンの Oracle Workflow に応じた Oracle Database コンポーネントを使用する場合、Oracle Workflow サーバーを Oracle E-Business Suite インスタンス用に使用されていないデータベースにインストールする必要があります。

Oracle E-Business Suite データベースの場合、かわりに Oracle E-Business Suite に組み込まれた Oracle Workflow Server を継続して使用できます。

関連項目： Oracle Workflow Client のインストールの詳細は、Oracle Technology Network (OTN) の『Oracle Workflow Client インストレーション・ガイド』を参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/>

Oracle Workflow Client は Oracle Technology Network で入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/products/ias/workflow/>

Oracle Workflow をインストールする他のインストール・タイプ

Oracle Workflow は、次の製品の一部のインストール・タイプでもインストールされます。

- Oracle Application Server 10g
- Oracle Content Management SDK 10g

これらのいずれかの製品をインストールしている場合、Oracle Workflow はインストール済のこともあります。この場合は Oracle Workflow を再度インストールする必要はありません。

Oracle Ultra Search

また、様々な種類の検索アプリケーションを作成できます。Oracle Ultra Search を使用すると、Web サイト、データベース表、ファイル、メーリング・リスト、Oracle Application Server のポータルおよびユーザー定義のデータソースを索引付けおよび検索できます。

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

Oracle Database 10g Products インストール・タイプでは、JAccelerator および Oracle *interMedia Image Accelerator* がインストールされます。これには、Oracle JVM および Oracle *interMedia* 用のネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP) が含まれています。プラットフォーム上でこの 2 つの製品のパフォーマンスを改善するには、これらのライブラリが必要です。

JPublisher

JPublisher は Java ユーティリティであり、Java プログラム内で次のユーザー定義データベース・エンティティを表す Java クラスを生成します。

- SQL オブジェクト型
- オブジェクト参照型 (REF 型)
- SQL コレクション型 (VARRAY 型または NESTED TABLE 型)
- PL/SQL パッケージ
- サーバー・サイド Java クラス
- SQL 問合せおよび DML 文

JPublisher を使用すると、SQL オブジェクト型、オブジェクト参照型およびコレクション型 (VARRAY またはネストした表) から Java クラスへのマッピングを強い型指定で指定し、カスタマイズできます。

また、JPublisher で PL/SQL パッケージ用のクラスも生成できます。これらのクラスは、PL/SQL パッケージ内でストアド・プロシージャを起動するためのラッパー・メソッドを持ちます。

さらに、JPublisher により Java から PL/SQL のみの型へのアクセスが単純化されます。PL/SQL の型と SQL の型の間で事前定義済マッピングまたはユーザー定義マッピングを使用したり、これらの型の間で PL/SQL 変換ファンクションを使用できます。これらの型が適切に対応していれば、JPublisher では必要な Java および PL/SQL コードが自動的に生成されます。

SQL または PL/SQL エンティティを Java に公開するのと同じ方法で、サーバー・サイド Java クラスをクライアント・サイド Java クラスに公開できます。これにより、アプリケーションからデータベースの Java クラスを直接コールできます。

JPublisher を使用すると、生成された Java クラスを Web サービスとして公開できます。たとえば、SQL または PL/SQL エンティティやサーバー・サイド Java エンティティを公開できます。

JPublisher は、生成されるほとんどの Java クラスで SQLJ コードを使用するため、Oracle SQLJ Translator および Oracle SQLJ Runtime が組み込まれています。Oracle SQLJ は、Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。

Oracle SQLJ Translator

JPublisher は生成されるクラスで SQLJ コードを使用するため、必要に応じて、コードの生成プロセスで Oracle SQLJ Translator を自動的に起動します。Oracle SQLJ Translator は、埋込み SQL 文を JDBC コールに変換します。

Oracle SQLJ Runtime

Oracle SQLJ Runtime はプログラムの実行中に使用され、JPublisher によって生成されたほとんどのクラスを実行します。SQLJ Runtime は、JDBC ドライバ上で動作する、Pure Java コードの Thin レイヤーです。SQLJ Runtime は、SQL 操作に関する情報を読み取り、JDBC ドライバに指示を伝達する中間プログラムとして機能します。

関連項目： 『Oracle Database JPublisher ユーザーズ・ガイド』

Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品

次の各製品は、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールできます。

- [Oracle Workflow 中間層コンポーネント](#)
- [Oracle HTTP Server](#)

注意： Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウでは、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品の詳細リストが示されます。

Oracle Workflow 中間層コンポーネント

Oracle Workflow 中間層コンポーネントを使用すると、Oracle Workflow のデータベース・アクセス記述子 (DAD) や仮想ディレクトリ・マッピングも含めて、Oracle Workflow ユーザー・インタフェース Web ページが使用可能になります。Oracle Workflow Server を使用する前に、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする必要があります。Oracle Workflow 中間層コンポーネントは Oracle Workflow Server がインストールされた Oracle データベースと関連付けられます。

Oracle Workflow Server のインストール後、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするには、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプを使用します。

Oracle HTTP Server

1-3 ページの「[Oracle HTTP Server](#)」では、Oracle HTTP Server の詳細について説明します。

Oracle Database Companion CD の要件

この章では、Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストールに必要な要件について説明します。

- [Oracle HTML DB 製品の要件](#)
- [Requirements for Oracle Database 10g Products](#)
- [Oracle Database 10g Companion Products の要件](#)
- [ハードウェアおよびソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database Companion CD のネットワークに関するトピック](#)

Oracle HTML DB 製品の要件

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTML DB 要件](#)

Oracle HTML DB 要件

この項の内容は、次のとおりです。

- [要件の概要](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [ブラウザの要件](#)
- [Oracle Database の要件](#)
- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [Oracle XML DB の要件](#)
- [Oracle Text の要件](#)

要件の概要

[表 2-1](#) は、Oracle HTML DB の各インストール・オプションの要件の要約です。各要件の詳細は、後述の各項を参照してください。

表 2-1 Oracle HTML DB の要件

インストール・オプション	必須ディスク領域	必須ブラウザ	必須製品
Oracle HTML DB のみ (Oracle HTTP Server ホーム へのインストール)	合計ディスク領域: 682.13MB 詳細: 2-3 ページの「 ディスク領域要件 」	■ Netscape Communicator 7.0 ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista) ■ Mozilla 1.2 ■ Firefox 1.0.4 詳細: 2-3 ページの「 ブラウザの要件 」	■ Oracle Database ■ Oracle HTTP Server ■ Oracle XML DB ■ Oracle Text 詳細: ■ 2-3 ページの「Oracle Database の要件」 ■ 2-4 ページの「Oracle HTTP Server の要件」 ■ 2-4 ページの「Oracle XML DB の要件」 ■ 2-4 ページの「Oracle Text の要件」
Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server	合計ディスク領域: 1.03GB 詳細: 2-3 ページの「 ディスク領域要件 」	Oracle HTML DB のみのインストールと同じ	■ Oracle Database ■ Oracle XML DB ■ Oracle Text 詳細: ■ 2-3 ページの「Oracle Database の要件」 ■ 2-4 ページの「Oracle XML DB の要件」 ■ 2-4 ページの「Oracle Text の要件」

ディスク領域要件

次のディスク領域サイズは、Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のみに適用されます。既存の Oracle Database インストールのサイズは含まれていません。

Oracle HTML DB のみに対するディスク領域要件

- TEMP 領域 : 110MB
- `SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle` ディレクトリ : 0.13MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\ORACLE_HOME` ディレクトリ : 342MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\oradata` ディレクトリ : 230MB (データファイル)
- 合計 : 682.13MB

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server 両方に対するディスク領域要件

- TEMP 領域 : 110MB
- `SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle` ディレクトリ : 1.12MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\ORACLE_HOME` ディレクトリ : 715MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\oradata` ディレクトリ : 230MB (データファイル)
- 合計 : 1.03GB

ブラウザの要件

Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。この要件を満たしているブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.0 以降
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降 (Windows のみ)
- Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista)
- Mozilla 1.2 以降
- Firefox 1.0.4

Oracle Database の要件

Oracle HTML DB には、リリース 9.2.0.3 以上の Oracle データベースが必要です。Oracle HTML DB は Oracle HTTP Server を含む Oracle ホームにインストールする必要があります。この Oracle ホームは、Oracle HTML DB が Oracle Net を使用してこのデータベースにアクセスできるかぎり、Oracle Database ホームとは別の物理サーバー上に存在することが可能です。

たとえば、Oracle Database が `OraDB10g_home1` にインストールされている場合、Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTML DB をインストールし、Oracle データベースの入力を求めるプロンプトが表示されたとき、そのホームの Oracle Database を指定できますが、Oracle HTML DB は Oracle HTTP Server を含むそれ自体のホーム（たとえば、`OraDB10g_home2`）にインストールする必要があります。

Oracle HTTP Server の要件

Oracle HTML DB を実行するには、Oracle HTTP Server および `mod_plsql` にアクセスする必要があります。選択する Oracle HTML DB インストール・オプションによって、この要件を満たす Oracle HTTP Server の使用可能なバージョンが決まります。

- **Oracle HTML DB のみ**：「Oracle HTML DB のみ」インストール・オプションを選択する場合は、既存の Oracle HTTP Server ホームにインストールする必要があります。この要件を満たすのは、Oracle9i リリース 2 (9.2) 以上です。

Oracle HTTP Server のオペレーティング・システムおよび Service Pack の最小要件は次のとおりです。

- Windows 2000 Service Pack 3 以上

Windows 2000 には、Windows 2000 Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows 2000 Datacenter Server およびターミナル サービスがあります。

- Windows 2003
- Windows 2003 R2
- Windows XP Professional
- Windows Vista

注意：Windows Multilingual User Interface Pack は、Windows 2003、Windows XP および Windows Vista でサポートされています。

システムがこれらの要件を満たさない場合は、「Oracle HTML DB のみ」ではなく「Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server」インストール・オプションを選択してください。

- **Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server**：Oracle Database 10g Companion Products リリースに含まれている Oracle HTTP Server のバージョンをインストールする場合は、その要件について 2-9 ページの「[Companion Products とともに提供される Oracle HTTP Server](#)」を参照してください。

Oracle XML DB の要件

Oracle HTML DB に使用する Oracle データベースには、Oracle XML DB を先にインストールする必要があります。インストール時に作成された、あるいはデータベース・コンフィギュレーション・アシスタント (DBCA) により作成された事前構成済データベースを使用する場合、Oracle XML DB のインストールと構成はすでに完了しています。

関連項目：Oracle XML DB を手動で既存のデータベースに追加する方法の詳細は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

Oracle Text の要件

Oracle HTML DB で検索可能なオンライン・ヘルプを使用するには、Oracle Text をインストールする必要があります。Oracle Text は、デフォルトで Oracle Database の一部としてインストールされます。

さらに、Oracle Text のデフォルトの言語プリファレンスがインストールされていることを確認してください。Oracle Text のデフォルトの言語をインストールするには、Oracle HTML DB をインストールする Oracle データベースにログインし、適切な `drdeflang.sql` スクリプトを実行してください。このスクリプトは、デフォルトで

`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\ctx\admin\defaults` にあります。たとえば、アメリカ英語の言語プリファレンス・スクリプト `drdefus.sql` を実行するには、次のように記述します。

```
c:\> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
SQL> @c:\oracle\product\10.2.0\db_1\ctx\admin\defaults\drdefus.sql
```

関連項目：Oracle Text の詳細は、『Oracle Text アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

Requirements for Oracle Database 10g Products

この項の内容は、次のとおりです。

- [要件の概要](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [Oracle Database の要件](#)
- [Oracle Workflow Server のブラウザ要件](#)
- [Oracle Workflow Server の製品要件](#)

関連項目：1-4 ページの「[Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

要件の概要

表 2-2 は、Oracle Database 10g Products インストールの要件の要約です。各要件の詳細は、後述の各項を参照してください。

表 2-2 Oracle Database 10g Products の要件

必須ディスク領域	必須ブラウザ	必須製品
合計 : 960.2MB 詳細 : 2-5 ページの「 ディスク領域要件 」	Oracle Workflow Server に必要なブラウザ ■ Netscape Communicator 7.2 ■ Mozilla 1.7 ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista) ■ Firefox 1.0.4 ■ Safari 1.2 詳細 : 2-6 ページの「 Oracle Workflow Server のブラウザ要件 」	■ Oracle Database ■ Oracle Workflow Server に、Oracle Database の他に必要な製品 : unzip ユーティリティ、JDK 1.4、アウトバウンド SMTP メール・サーバー (オプション) およびインバウンド IMAP メール・サーバー (オプション) 詳細 : ■ 2-6 ページの「Oracle Database の要件」 ■ 2-6 ページの「Oracle Workflow Server の製品要件」

ディスク領域要件

次のディスク領域サイズは、Oracle Database 10g Products のみに必要なサイズです。既存の Oracle Database インストールのサイズは含まれていません。

- TEMP 領域 : 130MB
- `SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle` ディレクトリ : 0.2MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\ORACLE_HOME` ディレクトリ : 790MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\oradata` : 40MB
- 合計 : 960.2MB

Oracle Database の要件

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプをインストールするためには、システムが Oracle Database リリース 2 (10.2) にアクセスできる必要があります。

関連項目：『Oracle Database インストレーション・ガイド』

Oracle Workflow Server のブラウザ要件

Oracle Workflow Server には、フレーム、JavaScript、Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4 および AWT をサポートする Web ブラウザが必要です。この要件を満たしている Web ブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.2 以降
- Mozilla 1.7 以降
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降
- Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista)
- Firefox 1.0.4 以降
- Safari 1.2 以降

Oracle Workflow Server の製品要件

Oracle Workflow Server を実行するには、Oracle Database の他に次の製品が必要です。

- wfdoc.zip ファイルから Workflow HTML ヘルプを抽出するための unzip ユーティリティ。たとえば、NicoMak の WINZIP などです。
- Oracle Workflow Java 関数アクティビティ・エージェントおよび Workflow XML Loader を実行する Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4。
- アウトバウンド SMTP メール・サーバーおよびインバウンド IMAP メール・サーバー (Oracle Workflow の通知メーラーを使用して電子メール通知の送受信を行う場合)。

Oracle Database 10g Companion Products の要件

この項の内容は、次のとおりです。

- [要件の概要](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [ブラウザの要件](#)
- [Oracle Workflow Server の要件](#)
- [Oracle HTTP Server の要件](#)

関連項目：1-8 ページの「[Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

要件の概要

表 2-3 は、Oracle Database 10g Companion Products の各インストール・オプションに対する要件の要約です。各要件の詳細は、後述の各項を参照してください。

表 2-3 Oracle Database 10g Companion Products の要件

インストール・オプション	必須ディスク領域	必須ブラウザ	必須製品
Oracle Workflow 中間層コンポーネント (Oracle HTTP Server ホームへのインストール)	合計 : 111.15MB 詳細 : 2-8 ページの「ディスク領域要件」	■ Netscape Communicator 7.2 ■ Mozilla 1.7 ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista) ■ Firefox 1.0.4 ■ Safari 1.2 詳細 : 2-8 ページの「ブラウザの要件」	■ Oracle Database ■ Oracle Workflow Server ■ Oracle HTTP Server 詳細 : ■ 2-10 ページの「Oracle Database の要件」 ■ 2-9 ページの「Oracle Workflow Server の要件」 ■ 2-9 ページの「Oracle HTTP Server の要件」
Oracle Workflow 中間層コンポーネントおよび Oracle HTTP Server	合計 : 481.11MB 詳細 : 2-8 ページの「ディスク領域要件」	■ Netscape Communicator 7.2 ■ Mozilla 1.7 ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Firefox 1.0.4 ■ Safari 1.2 詳細 : 2-8 ページの「ブラウザの要件」	■ Oracle Database ■ Oracle Workflow Server 詳細 : ■ 2-10 ページの「Oracle Database の要件」 ■ 2-9 ページの「Oracle Workflow Server の要件」
Oracle HTTP Server のみ	合計 : 463.1MB 詳細 : 2-8 ページの「ディスク領域要件」	■ Netscape Communicator 7.2 ■ Mozilla 1.7 ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Firefox 1.0.4 ■ Safari 1.2 詳細 : 2-8 ページの「ブラウザの要件」	Oracle Database 詳細 : 2-10 ページの「Oracle Database の要件」

ディスク領域要件

次のディスク領域サイズは、Oracle Database 10g Companion Products のみに必要なサイズです。既存の Oracle Database インストールのサイズは含まれていません。

Oracle Workflow 中間層コンポーネントのみに対するディスク領域要件

- TEMP 領域 : 90MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle` ディレクトリ : 0.15MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME` ディレクトリ : 21MB
- 合計 : 111.15MB

Oracle Workflow 中間層コンポーネントおよび Oracle HTTP Server に対するディスク領域要件

- TEMP 領域 : 90MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle` ディレクトリ : 1.11MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME` ディレクトリ : 390MB
- 合計 : 481.11MB

Oracle HTTP Server のみに対するディスク領域要件

- TEMP 領域 : 90MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle` ディレクトリ : 1.1MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME` ディレクトリ : 372MB
- 合計 : 463.1MB

ブラウザの要件

Oracle Database 10g Companion Products には、フレーム、JavaScript、Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4 および AWT をサポートする Web ブラウザーが必要です。この要件を満たしている Web ブラウザーは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.2 以降
- Mozilla 1.7 以降
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降
- Microsoft Internet Explorer 7.0 (Windows Vista)
- Firefox 1.0.4 以降
- Safari 1.2 以降

Oracle Workflow Server の要件

Oracle Workflow Server がインストールされていない場合、Oracle Database 10g 製品のインストールについてはこのマニュアルの指示に従ってください。Oracle Workflow Server のインストール後、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用して構成する必要があります。

Oracle Workflow Server は、Oracle Database 10g の Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle Universal Installer を使用して、Oracle ホームの内容を確認できます。

関連項目： Oracle ホームの内容を検索する方法は、3-9 ページの「[Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別](#)」を参照してください。

Oracle HTTP Server の要件

Oracle Workflow 中間層コンポーネントを実行するには、Oracle HTTP Server にアクセスする必要があります。Oracle Database 10g Companion Products と併用可能な Oracle HTTP Server のバージョンをインストールできます。または、既存の Oracle HTTP Server インストールを使用することもできます。

- [Companion Products とともに提供される Oracle HTTP Server](#)
- [既存の Oracle HTTP Server インストールの使用](#)

Companion Products とともに提供される Oracle HTTP Server

Oracle Database 10g Companion Products と併用可能な Oracle HTTP Server のバージョンを使用する場合は、このバージョンの Oracle HTTP Server を Companion Products とともに独自の Oracle HTTP Server ホームにインストールできます。このオプションを選択する場合は、次の要件を満たしていることを確認してください。

- [要件の概要](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件](#)
- [Oracle Database の要件](#)

要件の概要

表 2-4 は、Oracle HTTP Server インストールの要件の要約です。各要件の詳細は、後述の各項を参照してください。

表 2-4 Oracle HTTP Server の要件

必須ディスク領域	必須のオペレーティング・システムおよび Service Pack	必須製品
合計 : 463.1MB 詳細 : 2-10 ページの「 ディスク領域要件 」	■ Windows 2000 Service Pack 3 以上 ■ Windows 2003 ■ Windows XP ■ Windows Vista 詳細 : 2-10 ページの「 オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件 」	Oracle Database 詳細 : 2-10 ページの「 Oracle Database の要件 」

ディスク領域要件

Oracle HTTP Server のディスク領域要件は、次のとおりです。

- TEMP 領域 : 90MB
- `SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle` ディレクトリ : 1.1MB
- `SYSTEM_DRIVE:\ORACLE_BASE\ORACLE_HOME` ディレクトリ : 372MB
- 合計 : 463.1MB

オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件

Oracle HTTP Server のオペレーティング・システムおよび Service Pack の最小要件は次のとおりです。

- Windows 2000 Service Pack 3 以上
Windows 2000 には、Windows 2000 Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows 2000 Datacenter Server およびターミナル サービスがあります。
- Windows 2003
- Windows XP Professional
- Windows Vista

注意： Windows Multilingual User Interface Pack は、Windows 2003、Windows XP および Windows Vista でサポートされています。

Oracle Database の要件

Oracle HTTP Server を実行するには、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) 以上にアクセスできる必要があります。Oracle Database は、Oracle Net でアクセスできるかぎり、Oracle HTTP Server とは異なるシステム上に存在することが可能です。ただし、Oracle HTTP Server は個別のホームに存在する必要があります。

たとえば、Oracle Database が `OraDB10g_home1` にインストールされている場合、Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTTP Server をインストールするとき、そのホームの Oracle Database を指定できますが、Oracle HTTP Server はそれ自体のホーム（たとえば、`OraDB10g_home2`）に Oracle Database 10g Companion Products とともにインストールする必要があります。

既存の Oracle HTTP Server インストールの使用

Oracle Database 10g Companion Products を既存の Oracle HTTP Server ホームにインストールする場合は、このバージョンの Oracle HTTP Server に `mod_plsql` があることを確認してください。この要件を満たすのは、Oracle 9i リリース 2 (9.2) 以上です。

ハードウェアおよびソフトウェア要件

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが動作保証されている場合があるため、動作保証されたハードウェア・プラットフォームおよびオペレーティング・システムのバージョンに関する最新情報は、Oracle MetaLink の Web サイトで動作要件マトリックスを確認してください。Oracle MetaLink の Web サイトには、次の URL でアクセスできます。

<https://metalink.oracle.com/>

Oracle MetaLink を使用するには、オンラインでの登録が必要です。ログイン後に、左側の列から「**Certify & Availability**」を選択します。「**Product Lifecycle**」ページで、「**Certifications**」ボタンを選択します。「**Other Product Lifecycle**」オプションには、「**Product Availability**」、「**Desupport Notices**」および「**Alerts**」が含まれます。

後述の各項では、次の要件の情報を示します。

- [Windows Telnet サービスのサポート](#)
- [Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)

Windows Telnet サービスのサポート

Windows 2000、Windows 2003、Windows XP および Windows Vista には Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログインし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用するコマンドライン・ユーティリティの使用をサポートしていますが、Oracle Universal Installer、データベース・コンフィギュレーション・アシスタントおよび Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントなどのデータベース GUI ツールはサポートしていません。

注意： Windows の「サービス」ユーティリティで Telnet サービスが開始されていることを確認してください。

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では Windows Terminal Service を使用して、すべての Windows オペレーティング・システムに対応した Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server をインストール、設定および実行できます。Windows 2000 では Terminal Services Client は使用できません。ただし、ターミナル サービスのクライアントを使用する必要がある場合は、Windows Server 2003 でのみ使用できます。クライアントで Oracle HTTP Server または Oracle HTML DB をインストールしようとすると、多くの構成ツールが応答を停止します。すべての構成ツールをターミナル サービスのコンソールから起動し（mstsc/console を使用）、ターミナル サービスのクライアントからは起動しないでください。

関連項目：

- ターミナル サービスの詳細は、Microsoft の Web サイトを参照してください。
<http://www.microsoft.com/>
- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、Oracle MetaLink Web サイトを参照してください。

<http://metalink.oracle.com/>

Oracle Database Companion CD のネットワークに関するトピック

一般的に、Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータは、ネットワークに接続されており、このインストールを格納するローカル記憶域、表示モニター、および DVD ドライブを備えています。

この項では、この一般的な条件を満たしていないコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする方法について説明します。次の場合について説明します。

- [DHCP コンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール](#)
- [複数の IP アドレスを持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール](#)
- [複数の別名を持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール](#)
- [ループバック・アダプタのインストール](#)

DHCP コンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) はネットワークに動的な IP アドレスを割り当てます。動的アドレス指定により、コンピュータはネットワークに接続するたびに、異なる IP アドレスを取得できます。場合によっては、コンピュータの接続中に IP アドレスを変更することもできます。1つの DHCP システムに静的および動的な IP アドレス割当てを混在させることも可能です。

ソフトウェアは DHCP 設定内で IP アドレスを追跡するため、ネットワーク管理が簡素化されます。このため、新規のコンピュータをネットワークに追加する際は、そのコンピュータに固有の IP アドレスを手動で割り当てる必要はありません。ただし、DHCP プロトコルを使用するコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする前に、そのコンピュータにローカル IP アドレスを割り当てるためのループバック・アダプタをインストールする必要があります。

関連項目： 2-14 ページの「[ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック](#)」

複数の IP アドレスを持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール

Oracle Database Companion CD を、複数の IP アドレスを持つコンピュータ（マルチホーム・コンピュータとも呼ばれます）にインストールできます。通常、マルチホーム・コンピュータには複数のネットワーク・カードが搭載されています。各 IP アドレスは 1 つのホスト名に関連付けられ、さらにそのホスト名に別名を設定できます。Oracle Universal Installer は、デフォルトで ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定を使用してホスト名を検索します。

ORACLE_HOSTNAME が設定されておらず、インストール先コンピュータに複数のネットワーク・カードが搭載されている場合、Oracle Universal Installer では hosts ファイルの最初の名前を使用してホスト名が判別されます。このファイルは通常、Windows 2003、Windows XP および Windows Vista の場合は `SYSTEM_DRIVE:\%WINDOWS%\system32\drivers\etc、` Windows 2000 の場合は `SYSTEM_DRIVE:\%WINNT%\system32\drivers\etc` にあります。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用してコンピュータにアクセスすることが必要です。確認するには、短縮名（ホスト名のみ）およびフルネーム（ホスト名およびドメイン名）を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名に対して ping を実行します。どちらも機能する必要があります。

ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定

ORACLE_HOSTNAME 環境変数を設定する手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルの「システム」を表示します。
2. 「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「詳細」をクリックします。
3. 「詳細」タブで、「環境変数」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログ・ボックスで、「システム環境変数」の下「新規」をクリックします。
5. 「新しいシステム変数」ダイアログ・ボックスで、次の情報を入力します。
 - 変数名: ORACLE_HOSTNAME
 - 変数値: 使用するコンピュータのホスト名
6. 「OK」をクリックし、続いて「環境変数」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
7. 「環境変数」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックし、「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

複数の別名を持つコンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール

複数の別名を持つコンピュータは、1つの IP と複数の別名でネーミング・サービスに登録されます。ネーミング・サービスでは、これらの別名を同じコンピュータに対して解決します。この種のコンピュータに Oracle Database をインストールする前に、ORACLE_HOSTNAME 環境変数を、ホスト名を使用するコンピュータに設定してください。

ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタによりコンピュータにローカル IP アドレスが割り当てられます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールすると、コンピュータにはユーザーが所有するネットワーク・アダプタとループバック・アダプタの最低 2 つのネットワーク・アダプタが存在します。Oracle Database Companion CD 製品には、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用する Windows が必要です。

プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序によって決定されます。最後にインストールしたアダプタがプライマリ・アダプタになります。ループバック・アダプタをインストールした後に追加のネットワーク・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタを削除してから再インストールする必要があります。

DHCP コンピュータでインストールする場合、ループバック・アダプタが必要です。

関連項目: 2-12 ページの「[DHCP コンピュータへの Oracle Database Companion CD のインストール](#)」

この項の内容は、次のとおりです。

- [ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック](#)
- [Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows Vista でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [ループバック・アダプタの削除](#)

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかを確認するには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
SYSTEM_DRIVE:> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、ループバック・アダプタの値の一覧を示すセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:
  Connection-specific DNS Suffix . . . : 
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50
  DHCP Enabled. . . . . : Yes
  Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2000 は、最後にインストールされたネットワーク・アダプタについて報告します。つまり、ループバック・アダプタをインストールした後に追加のネットワーク・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタを削除してから再インストールする必要があります。ループバック・アダプタは、コンピュータにインストールされた最後のネットワーク・アダプタである必要があります。

Windows 2000 でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックしてハードウェアの追加と削除ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアに関する作業の選択」ウィンドウで、「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「ハードウェア デバイスの選択」ウィンドウで、「新しいデバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「新しいハードウェアの検索」ウィンドウで、「いいえ、一覧からハードウェアを選択します」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「ハードウェアの種類」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」ウィンドウで、次の操作を行います。
 - a. 製造元: 「Microsoft」を選択します。
 - b. ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
 - c. 「次へ」をクリックします。
9. 「ハードウェアのインストールの開始」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ウィンドウで、「完了」をクリックします。
11. デスクトップの「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「ネットワーク接続」コントロールパネルが表示されます。
12. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常、「ローカル エリア接続 2」です。「プロパティ」を選択します。
13. 「全般」タブで、「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択し、「プロパティ」をクリックします。

14. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「**次の IP アドレスを使う**」をクリックして次の処理を実行します。
 - a. **IP アドレス**: ループバック・アダプタに対してルーティング不能 IP アドレスを入力します。次のルーティング不能アドレスを推奨します。
 - 192.168.x.x (x は 0 ～ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネットマスク**: 255.255.255.0 を入力します。
 - c. 入力した値を記録します。この値は、この手順で後で必要になります。
 - d. その他のフィールドはすべて空のままにします。
 - e. 「OK」をクリックします。
15. 「ネットワーク接続」ウィンドウを閉じます。
16. コンピュータを再起動します。
17. `SYSTEM_DRIVE:\WINNT\system32\drivers\etc\hosts` ファイルで、localhost 行の直後に次の形式の行を追加します。


```
IP_address hostname.domainname hostname
```

各項目の意味は次のとおりです。

 - `IP_address` は、手順 14 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
 - `hostname` はコンピュータ名です。
 - `domainname` はドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```
18. ネットワークの構成を確認します。
 - a. コントロールパネルの「システム」を開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。
「フルコンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。例: sales.us.mycompany.com
 - b. 「プロパティ」をクリックします。
「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。前述の例を使用すると、ホスト名は sales、ドメインは us.mycompany.com です。
 - c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名 (例: us.mycompany.com) が表示されます。
 - d. コントロールパネルの「システム」を終了します。

Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2003 または Windows XP でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルを開きます。
2. 「**ハードウェアの追加**」をダブルクリックしてハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」ウィンドウで、「**はい、ハードウェアを接続しています**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」ウィンドウのインストール済ハードウェアのリストで、「**新しいハードウェア デバイスの追加**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」ウィンドウで、「**一覧から選択したハードウェアをインストールする**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
7. 「インストールするハードウェアの種類を選択する」リストのハードウェアの種類のリストから、「**ネットワーク アダプタ**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」ウィンドウで、次の選択を行います。
 - **製造元**: 「**Microsoft**」を選択します。
 - **ネットワーク アダプタ**: 「**Microsoft Loopback Adapter**」を選択します。
9. 「**次へ**」をクリックします。
10. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
11. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ウィンドウで、「**完了**」をクリックします。
12. Windows 2003 を使用している場合は、コンピュータを再起動します。
13. デスクトップの「**マイ ネットワーク**」を右クリックし、「**プロパティ**」を選択します。これにより、「ネットワーク接続」コントロール パネルが表示されます。
14. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常、「ローカル エリア接続 2」です。「**プロパティ**」を選択します。
15. 「**全般**」タブで、「**インターネット プロトコル (TCP/IP)**」を選択し、「**プロパティ**」をクリックします。
16. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「**次の IP アドレスを使う**」をクリックして次の処理を実行します。
 - a. **IP アドレス**: ループバック・アダプタに対してルーティング不能 IP アドレスを入力します。次のルーティング不能アドレスを推奨します。
 - 192.168.x.x (x は 0 ～ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネット マスク**: 255.255.255.0 を入力します。
 - c. 入力した値を記録します。この値は、この手順で後で必要になります。
 - d. その他のフィールドはすべて空のままにします。
 - e. 「**OK**」をクリックします。
17. 「**OK**」をクリックします。
18. 「**ネットワークの接続**」を閉じます。
19. コンピュータを再起動します。

20. `SYSTEM_DRIVE:¥WINDOWS¥system32¥drivers¥etc¥hosts` ファイルで、localhost 行の直後に次の形式の行を追加します。

```
IP_address    hostname.domainname    hostname
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `IP_address` は、手順 16 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
- `hostname` はコンピュータ名です。
- `domainname` はドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10    mycomputer.mydomain.com    mycomputer
```

21. ネットワークの構成を確認します。
- a. コントロール パネルの「システム」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。例: sales.us.mycompany.com
 - b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フル コンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。前述の例を使用すると、ホスト名は sales、ドメインは us.mycompany.com です。
 - c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名（例: us.mycompany.com）が表示されます。

Windows Vista でのループバック・アダプタのインストール

Windows Vista でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルを開きます。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックしてハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
4. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」ウィンドウで、「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「インストールするハードウェアの種類を選択する」リストのハードウェアの種類のリストから、「ネットワーク アダプタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「ネットワーク アダプタの選択」ウィンドウで、次の選択を行います。
 - 製造元: 「Microsoft」を選択します。
 - ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
9. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ウィンドウで、「完了」をクリックします。

その他の手順は Windows XP の場合と同じです。

ループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタを削除する手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルの「システム」を表示します。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を展開します。
「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「アンインストール」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

Oracle Database Companion CD ソフトウェア のインストール

この章の内容は、次のとおりです。

- [Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順](#)
- [インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)
- [Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール](#)
- [Oracle Database 10g Products のインストール](#)
- [Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)
- [Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除](#)

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順

第1章および第2章の作業を完了後、Companion CD 製品をインストールする一般的な手順に従います。

1. 次の点を考慮してください。
 - **対話型モードあるいはサイレントまたは非対話型モードでのインストール:** この章では、対話型モードでインストールする場合の手順を説明しています。レスポンス・ファイルを使用してサイレントまたは非対話型モードでインストールを実行する場合（たとえば、サイトで複数のインストールが必要な場合）、詳細は、[付録 B 「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール」](#) を参照してください。
 - **他の言語でのインストール:** 言語の考慮事項については、C-2 ページの「[異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用](#)」を参照してください。
2. ソフトウェアをハード・ドライブから、またはリモートでインストールする必要がある場合、3-2 ページの「[インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)」の手順に従ってください。
3. 次の項の手順に従ってインストールを完了してください。インストールに必要な手順は製品によって異なります。
 - 3-5 ページの「[Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール](#)」
Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server のホームにインストールします。現行の Oracle HTTP Server をインストールしていない場合は、インストール・プロセスで、これらの製品の両方をインストールできます。
 - 3-9 ページの「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」
Oracle Database 10g 製品に付属している Oracle Workflow Server を使用する場合は、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に、3-11 ページの「[Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備](#)」の手順を完了する必要があります。Oracle Workflow 中間層コンポーネントは、Oracle Database 10g Companion Products と併用できます。
 - 3-15 ページの「[Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)」
この項では、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする方法について説明します。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database ソフトウェアは DVD で提供されます。このリリースのコンポーネントのインストールには、以前のリリースの Oracle Universal Installer を使用しないでください。

次のいずれかの状況で Oracle Database Companion CD 製品をインストールする必要がある場合、インストール手順に進む前にこの項の手順に従ってください。

- [ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー](#)
- [リモート DVD ドライブからのインストール](#)
- [リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール](#)

ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー

Oracle Database Companion CD 製品の DVD からインストールするかわりに、DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールできます。ネットワークで Oracle Database Companion CD 製品の多くのインスタンスをインストールする場合、または製品をインストールするコンピュータに DVD ドライブがない場合は、この方法が簡単です。

インストール・メディアの内容をハード・ディスクにコピーするには、次のようにします。

1. ハード・ドライブにディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
c:\install\companion
```

2. インストール・メディアの内容を作成したばかりのディレクトリにコピーします。
3. 必要なインストール・ファイルをすべてコピーしたら、Oracle Database Companion CD 製品をインストールできます。

リモート DVD ドライブからのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータに DVD ドライブがない場合は、リモート DVD ドライブからインストールを実行できます。次の点について確認してください。

- [リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有](#)
- [ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング](#)

リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有

使用するリモート DVD ドライブで、共有アクセスを可能にする必要があります。これを設定するには、DVD ドライブがあるリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータに Administrator ユーザーとしてログインします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. DVD ドライブ文字を右クリックして、「共有」（または「共有とセキュリティ」）を選択します。
4. 「共有」タブをクリックして、次のようにします。
 - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
 - b. 「共有名」で、dvd などの共有名を指定します。この名前は、ローカル・コンピュータで DVD ドライブをマッピングする際に使用します。3-4 ページの「[ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング](#)」に記載されている手順 1 の d を参照してください。
 - c. 「アクセス許可」をクリックします。Oracle Database をインストールするためにアクセスするユーザーには、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。
 - d. 終了する場合、「OK」をクリックします。
5. Oracle Database インストール・メディアを DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング

ローカル・コンピュータで次の手順を実行して、リモート DVD ドライブをマッピングし、マッピングされたドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

1. リモート DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」メニューから、「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択して「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログを表示します。
 - c. リモート DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」で、次の形式を使用して、リモート DVD ドライブの場所を入力します。
`\\remote_hostname\share_name`
 各項目の意味は次のとおりです。
 - remote_hostname は、DVD ドライブのあるリモート・コンピュータの名前です。
 - share_name は、前述の手順 4 で入力した共有名です。次に例を示します。
`\\computer2\dvd`
 - e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合は「異なるユーザー名」をクリックして、ユーザー名を入力します。
 - f. 「完了」をクリックします。
2. マッピングされた DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールおよび実行（つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、これらのコンポーネントを実行）するのに、コンピュータへの物理的なアクセスがない場合、VNC または Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータで実行されていればリモート・コンピュータでインストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアが実行されている必要があります。

次のいずれかの方法で Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールできます。

- Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。
- DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、DVD からインストールできます。

ハード・ドライブからリモート・コンピュータへのインストール

Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。

次の手順を完了させる必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアをインストールし、リモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータで実行してください。
2. Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容を格納したハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブに割り当てます。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用し、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。

リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール

DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、DVD からインストールできます。これは 3-3 ページの「[リモート DVD ドライブからのインストール](#)」で説明した状況と類似しています。

次の手順を完了させる必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアをインストールし、リモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータで実行してください。
2. ローカル・コンピュータで、DVD ドライブを共有します。

リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 DVD ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。

この手順は、3-5 ページの「[リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール](#)」に記載されています。
3. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用し、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 DVD ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTML DB のインストール前の推奨作業](#)
- [Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server の Oracle ホームの位置](#)
- [Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール手順](#)

Oracle HTML DB のインストール前の推奨作業

Oracle HTML DB をインストールする前に、インストールに使用する Oracle データベースのバックアップを作成してください。バックアップを実行するには、Oracle Database インストールに含まれている Oracle Database Recovery Manager を使用できます。

関連項目：『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server の Oracle ホームの位置

Oracle HTML DB のみインストール・タイプをインストールする場合、Oracle HTML DB または Oracle HTTP Server のいずれか、あるいは Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server の両方をインストールできます。

これら 2 種類の製品の Oracle ホームの位置は、次のとおりです。

- **Oracle HTML DB:** Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server が格納されている Oracle ホームにインストールする必要があります。新規インストールでは、Oracle HTTP Server と同じホームに Oracle HTML DB をインストールします。Oracle HTTP Server がすでにインストールされている場合は、Oracle HTTP Server がインストールされている Oracle ホームに Oracle HTML DB をインストールできます。
- **Oracle HTTP Server:** Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。別々の Oracle ホーム・ディレクトリを使用していれば、同じシステムに複数の Oracle HTTP Server をインストールできます。

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール手順

この項では、次のいずれかのシナリオを使用して Oracle HTML DB をインストールする方法について説明します。

- **新しい Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server の両方のインストール:** Oracle Universal Installer により、Oracle HTML DB をインストールする Oracle HTTP Server ホームが作成されます。
- **既存の Oracle HTTP Server のホームへの Oracle HTML DB のインストール:** 既存の Oracle HTTP Server のホームに、新しい Oracle HTML DB をインストール、または既存の HTML DB をアップグレードできます。

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. Oracle HTML DB で使用する Oracle データベースが実行中でアクセス可能であることを確認します。
Windows の「サービス」ユーティリティを使用して、Oracle データベース・サービスが実行中かどうかを確認できます。このユーティリティは、Windows コントロールパネル、または（「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」メニューにあります。「サービス」リストの Oracle データベースの名前には、最初に OracleService が付きます。該当するデータベース・サービスの名前を右クリックして、ドロップダウン・メニューから「開始」を選択します。
3. ORACLE_HOME 環境変数がある場合は、（コントロールパネルの「システム」から）この環境変数を削除します。

環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意: 環境変数 ORACLE_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

4. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、companion ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリに移動します。

同じインストール・メディアを使用して、サポートされるすべての Windows プラットフォームに Oracle Database をインストールします。

5. setup.exe をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
6. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
7. 「インストールする製品の選択」ウィンドウで、**Oracle HTML DB** を選択して「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、次のいずれかを選択して「次へ」をクリックします。
 - **Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server:** Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server を新規の Oracle ホームにインストールする場合は、このオプションを選択します。
 - **Oracle HTML DB のみ:** 新規の Oracle HTML DB を既存の Oracle HTTP Server ホームにインストールする場合、または既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードする場合は、このオプションを選択します。
9. 「ホームの詳細の指定」ウィンドウで、次の項目を入力します。
 - **名前:** 前の手順で「**Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server**」を選択した場合は、新規の Oracle ホームを入力します。「**Oracle HTML DB のみ**」を選択した場合は、Oracle HTML DB が使用する既存の Oracle HTTP Server ホームの名前を選択します。
 - **パス:** 「名前」で指定した Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。空白を含むディレクトリ・パスは入力しないでください。正しいディレクトリ・パスを入力した後、Oracle Universal Installer により新規ディレクトリが作成されます。

関連項目: Oracle ホームの確認方法の詳細は、3-9 ページの「[Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別](#)」を参照してください。各ホームを選択して **Apache Standalone** を検索します。Oracle HTTP Server は、「ホームの詳細の指定」ウィンドウに Apache Standalone として表示されます。
10. 「次へ」をクリックします。
11. 「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで、Oracle HTML DB の一部としてインストールする追加コンポーネントを選択して「次へ」をクリックします。
12. 「製品固有の前提条件のチェック」ウィンドウでは、Oracle Universal Installer によってシステムがチェックされている間に発生する可能性のあるエラーを確認し、エラーがあった場合は修正します。
13. 「次へ」をクリックします。
14. 「HTML DB データベースの詳細の指定」ウィンドウで、Oracle HTML DB の構成に必要な情報を入力します。
 - **ホスト名**
データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなくコンピュータの名前 (myserver.us.mycompany.com など) を入力します。
 - **ポート**
データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。Oracle Database インストールの現在のポート番号を調べるには、tnsnames.ora ファイルをチェックします。このファイルは、デフォルトで ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥network¥admin にあります。
 - **データベース・サービス名**
Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名 (sales など) を指定します。(データベース・サービス名は、tnsnames.ora ファイルにあります。) または、ドメイン名を入力できます。通常、このドメイン名はグローバル・データベース名 (sales.us.mycompany.com など) と同じです。

Oracle HTML DB を構成するには、Oracle データベースに Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールする必要があります。このとき、リリース 9.2.0.3 以上のデータベースを選択する必要があります。10g の Oracle HTTP Server を使用する場合は、インストール時に入力した情報に基づいて、Oracle Universal Installer により、mod_plsql 構成ファイルにデータベース・アクセス記述子 (DAD) が、Oracle HTTP Server 構成ファイル httpd.conf にディレクトリ別名が自動的に作成されます。ただし、Oracle HTTP Server 9i リリース 2 を使用する場合、これらの設定は、[第 4 章](#)のインストール後の手順の説明に従って手動で作成する必要があります。

- **表領域名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (SYSAUX) を受け入れます。

- **SYS パスワード**

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

- **HTML DB パスワード**

Oracle HTML DB スキーマ (ユーザー) に使用するパスワードを指定します。これらのスキーマは、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に管理ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマにも使用され、mod_plsql がそのパスワードを使用してデータベースに接続します。また、FLOWS_010600 スキーマおよび FLOWS_FILES スキーマにも使用されます。

- **HTML DB パスワードの確認**

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

15. 「次へ」をクリックします。

16. 「サマリー」ウィンドウで、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。

17. インストールを完了後、「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。

18. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、OraInstalldate_time ディレクトリを削除します。OraInstalldate_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。このディレクトリは、TEMP 環境変数に設定されている場所に作成されます。

コンピュータを再起動した場合も、OraInstalldate_time ディレクトリが削除されません。

関連項目：

- Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のインストール後に完了する必要がある作業の詳細は、[第 4 章「Oracle Database Companion CD インストール後の作業」](#)を参照してください。
- 追加の Oracle HTML DB インスタンスをリモートの Oracle データベースにインストールする場合は、4-12 ページの「[リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

Oracle Database 10g Products のインストール

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置](#)
- [Oracle Database 10g Products のインストール手順](#)
- [Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備](#)

Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置

Oracle Database 10g Products は、既存の Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにインストールしてください。これらの製品は次のとおりです。

- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- Database Examples
- Oracle Text ナレッジ・ベース
- JAccelerator (NCOMP)
- *interMedia* Image Accelerator
- Oracle Workflow

Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別

Oracle Database 10g Products を既存の Oracle ホームにインストールする前に、この Oracle ホームの位置を識別する必要があります。Oracle ホーム・ディレクトリのパスが不明の場合には、Oracle Universal Installer で確認できます。

Oracle ホーム・ディレクトリのパスを確認するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
3. 「インベントリ」ウィンドウの各 Oracle ホームを開き、**Oracle Database 10g 10.2.0.1.0** を検索します。
4. 「閉じる」をクリックし、次に「取消」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
5. 次の項に記載されている Oracle Database 10g Products のインストールを開始する際は、Oracle ホームの名前を控えておきます。

Oracle Database 10g Products のインストール手順

要約すると、まず Oracle Universal Installer を実行して Oracle Database 10g Products をインストールします。その後、Oracle Workflow Server を構成してから Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールします。

Oracle Database 10g Products をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

2. Oracle Workflow で使用する Oracle データベースが実行中でアクセス可能であることを確認します。

Windows の「サービス」ユーティリティを使用して、Oracle Database が実行中かどうかを確認できます。このユーティリティは、Windows コントロール パネル、または（「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」メニューにあります。Oracle データベースの名前には、先頭に OracleService が付きます。サービスの名前を右クリックして、メニューから「開始」を選択します。

3. ORACLE_HOME 環境変数がある場合は、（コントロール パネルの「システム」から）この環境変数を削除します。

環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 環境変数 ORACLE_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

4. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、companion ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリに移動します。

同じインストール・メディアを使用して、サポートされるすべての Windows プラットフォームに Oracle Database をインストールします。

5. setup.exe をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
6. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
7. 「インストールする製品の選択」ウィンドウで、「Oracle Database 10g Products」を選択して「次へ」をクリックします。
8. 「ホームの詳細の指定」ウィンドウで、次のようにします。
 - a. **名前：** 指定した Oracle ホームが Oracle Database Oracle ホームであることを確認します。（デフォルトの Oracle ホームが設定されています。）
 - b. **パス：** Oracle Database の Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。このディレクトリには、Oracle ホームのファイルをインストールします。（デフォルトの Oracle ホームのディレクトリが設定されています。）空白を含むディレクトリ・パスは入力しないでください。正しいディレクトリ・パスを入力した後、Oracle Universal Installer により新規ディレクトリが作成されます。

関連項目： 正しい Oracle ホームの確認方法の詳細は、3-9 ページの「[Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別](#)」を参照してください。

9. 「次へ」をクリックします。
10. 「製品固有の前提条件のチェック」ウィンドウで、Oracle Universal Installer によるシステム・チェックの際に発生したエラーを確認し、エラーがあった場合は修正します。
11. 「次へ」をクリックします。

12. 「サマリー」ウィンドウで、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
13. インストールを完了後、「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
14. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、OraInstalldate_time ディレクトリを削除します。OraInstalldate_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。このディレクトリは、TEMP 環境変数に設定されている場所に作成されます。

コンピュータを再起動した場合も、OraInstalldate_time ディレクトリが削除されません。
15. Oracle HTTP Server を再起動します。次に例を示します。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目： 5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」

Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備

Oracle Workflow Server をインストールした後、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に Oracle Workflow Server を構成する必要があります。Oracle Workflow を構成するには、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用します。グラフィカル・ユーザー・インタフェースを使用して Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する手順は次のとおりです。

関連項目： 非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行の詳細は、B-7 ページの「[非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行](#)」を参照してください。

Oracle Workflow 中間層コンポーネントに Oracle Workflow Server を準備する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Workflow で使用する Oracle データベースが実行中でアクセス可能であることを確認します。

Windows の「サービス」ユーティリティを使用して、Oracle Database が実行中かどうかを確認できます。このユーティリティは、Windows コントロールパネル、または（「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」メニューにあります。Oracle データベースの名前には、先頭に OracleService が付きます。サービスの名前を右クリックして、メニューから「開始」を選択します。
2. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Workflow Configuration Assistant」を選択します。
3. 「Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントへようこそ」ウィンドウで、次の情報を入力します。
 - インストール・オプション：「サーバーのみ」または「言語の追加」を選択します。

「サーバーのみ」オプションを選択した場合、Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは Oracle Workflow を Oracle データベースにインストールします。

注意： Oracle Workflow リリース 2.6.4 にアップグレードするには、既存の Oracle Workflow Server がリリース 2.6.2 以上であることが必要です。

「言語の追加」インストール・オプションを選択した場合は、追加する言語の略語を選択します。Oracle Workflow は、言語を追加する前にインストールする必要があります。

関連項目： Oracle データベースで使用する言語の略語一覧は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

- **ワークフロー・アカウント：** Oracle Workflow データベース・アカウントに使用する名前を入力するか、デフォルト名（通常は owf_mgr）を受け入れます。

このアカウントのデフォルトの表領域は USERS で、一時表領域は TEMP です。必要に応じて表領域を変更できます。

注意： Oracle Workflow の既存インストール環境をアップグレードする場合は、既存の Oracle Workflow データベース・アカウントの名前およびパスワードを入力します。

- **ワークフロー・パスワード：** Oracle Workflow アカウントのパスワードを入力します。
- **SYS パスワード：** システム上の Oracle Database の SYS アカウントのパスワードを入力します。Oracle Workflow Server のインストールにはパスワードが必要ですが、言語を追加する場合、入力必須ではありません。
- **TNS 接続ディスクリプタ：** データベース接続文字列を TNS 形式で指定します。

```
(DESCRIPTION = (ADDRESS_LIST = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST =
host_name) (PORT = port_number))) (CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME =
database_service_name)))
```

接続文字列は tnsnames.ora ファイルに格納されます。このファイルは、デフォルトで ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin ディレクトリにあります。1 行で記述されている接続文字列を見つける簡単な方法は、コマンド・プロンプトで **tnsping** コマンドを実行して結果をテキスト・ファイルに出力し、接続文字列をコピーして「**TNS 接続ディスクリプタ**」ボックスに貼り付けます。たとえば、mau というサーバーの接続文字列を取得するには、次のコマンドを入力します。

```
c:\> tnsping mau > tns.txt
```

4. Oracle Internet Directory を Oracle Workflow のディレクトリ・リポジトリとして統合する場合は、「**LDAP パラメータを入力します**」チェック・ボックスを選択し、「**LDAP の値の取得**」を選択して Workflow の「LDAP パラメータ」ウィンドウを表示します。

注意： Oracle Internet Directory の統合をすでに行った、既存の Oracle Workflow をアップグレードする場合、アップグレード中に Oracle Internet Directory の統合を維持するために Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の値をここで再入力する必要があります。

接続する LDAP ディレクトリに関する次の LDAP サーバー情報を入力して「**OK**」をクリックします。インストール後、必要に応じてこれらの値を「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」Web ページでアップグレードできます。

関連項目： 詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項を参照してください。

- **LDAP ホスト名：** Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリがインストールされているホストを入力します。
- **LDAP 非 SSL ポート：** ホストで使用するポート番号を入力します。これは、Secure Sockets Layer (SSL) ポート以外のポートであることが必要です。

- **LDAP 管理ユーザー名**: LDAP サーバーへの接続に使用されるユーザー名を入力します。このユーザー名は書込み権限を持ち、LDAP ディレクトリにバインドされている必要があります。次に例を示します。

cn=orcladmin

- **LDAP 管理パスワード**: LDAP ユーザー・アカウントの Oracle Internet Directory パスワードを入力します。LDAP パスワードの値はアスタリスクで表示され、暗号化されて保存されます。

- **変更ログ DN**: 変更ログ・ファイルがある LDAP ノードを入力します。次に例を示します。

cn=changelog

- **ユーザー・ベース**: ユーザー・レコードのある LDAP ノードを入力します。次に例を示します。

cn=Base, cn=OracleSchemaVersion

注意: インストール中に Oracle Internet Directory と統合した後、WF_LDAP API を使用して Oracle Internet Directory と Oracle Workflow ディレクトリ・サービスを同期する必要があります。詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』を参照してください。

5. Oracle Internet Directory と統合しない場合、「LDAP パラメータを入力します」チェック・ボックスは選択しません。

6. シードされた Java ベースの通知メーラー・サービス・コンポーネントの Workflow 通知メーラーの構成パラメータを入力するには、「メーラー・パラメータを入力します」チェック・ボックスを選択し、「メーラーの値の取得」を選択してワークフロー・メーラー・パラメータを表示します。次のパラメータの値を入力して、「OK」をクリックします。

- **電子メール・アカウントのインバウンド**:

- **サーバー名**: インバウンド IMAP メール・サーバーの名前を入力します。

- **ユーザー名**: 通知メーラーが電子メール・メッセージを受信するメール・アカウントのユーザー名を入力します。

- **パスワード**: 「ユーザー名」パラメータで指定したメール・アカウントのパスワードを入力します。

- **電子メール・アカウントのアウトバウンド**: アウトバウンド SMTP メール・サーバーの名前を入力します。

- **電子メール処理**:

- **処理済フォルダ**: 通知メーラーが処理済通知メッセージを格納するインバウンド電子メール・アカウントのメール・フォルダの名前を入力します。

- **削除フォルダ**: 通知メーラーが通知メッセージとして認識されない受信メッセージを格納するインバウンド電子メール・アカウントのメール・フォルダの名前を入力します。

- **メッセージ生成: HTML エージェント**:

- **HTML エージェント**: HTML エージェントは、Oracle HTTP Server で Oracle Workflow に対して定義された Web エージェントを識別するベース URL です。通知メーラーは、この URL を使用して HTML 添付ファイル付きの電子メール通知をサポートします。このパラメータは、デフォルトで次のプレースホルダ値に設定されます。

http://localhost.com/pls/wf

Oracle HTTP Server をすでにインストールしている場合は、localhost.com を、Web リスナーがリクエストを受け入れるサーバーと TCP/IP ポート番号に置き換えます。それ以外の場合、このパラメータはプレースホルダ値に設定したま

まにします。この場合は、Oracle HTTP Server と Oracle Workflow のインストールを完了した後、Oracle Workflow Manager の通知メーラー構成ウィザードでこのパラメータを設定する必要があります。

関連項目：『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

- **返信先アドレス：**受信メッセージを受信する電子メール・アカウントのアドレスを入力します。通知レスポンスはそのアドレスに送信されます。

最初のインストール後、必要に応じて Oracle Workflow Manager で通知メーラーの構成値を更新できます。Oracle Workflow の HTML エージェントの値も「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」Web ページで更新できます。

関連項目：詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項および Oracle Workflow Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

7. Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てた表領域を変更するには、「**表領域の変更**」チェック・ボックスを選択して値の一覧から既存の表領域を選択します。
8. 「**送信**」を選択して構成を開始するか、「**終了**」を選択して構成を実行せずに Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを終了します。
9. 構成が完了すると、確認画面が表示されます。「**OK**」をクリックします。

`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\install\workflow.log` ファイルを確認して構成のステータスを確認できます。

Oracle Workflow に追加言語を追加する場合は、「**言語の追加**」インストール・オプションを使用して Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを再実行します。

Oracle Workflow の追加スキーマを追加するために、「**サーバーのみ**」インストール・オプションで Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを再実行しないでください。各 Oracle ホームに作成できる Oracle Workflow スキーマは 1 つのみです。実行しようとすると、コンフィギュレーション・アシスタントは正常に終了しますが、Oracle Workflow 中間層サービスでエラーが発生する場合があります。

Oracle Workflow スキーマを再作成する必要がある場合は、最初に既存のスキーマを削除してから Oracle Workflow を削除します。次に、この章で説明する手順に従って、Oracle Workflow を再インストールし、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用して新規の Oracle Workflow スキーマを作成します。

関連項目：Oracle Workflow Server のインストール後に完了する必要がある作業の詳細は、[第 4 章「Oracle Database Companion CD インストール後の作業」](#)を参照してください。

Oracle Database 10g Companion Products のインストール

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Database 10g Companion Products の Oracle ホームの位置](#)
- [Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストール手順](#)

Oracle Database 10g Companion Products の Oracle ホームの位置

Oracle Database 10g Companion Products をインストールする場合は、Oracle HTTP Server または Oracle Workflow 中間層コンポーネントのいずれか、あるいは Oracle HTTP Server と Oracle Workflow 中間層コンポーネントの両方をインストールできます。

これら 2 種類の製品の Oracle ホームの位置は、次のとおりです。

- **Oracle Workflow 中間層コンポーネント**: Oracle Workflow 中間層コンポーネントを新しい Oracle ホームにインストールする必要があります。新規のインストールでは、Oracle Workflow 中間層コンポーネントを Oracle HTTP Server と同じホームにインストールします。Oracle HTTP Server がすでにインストールされている場合は、Oracle HTTP Server がインストールされている Oracle ホームに Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールできます。
- **Oracle HTTP Server**: Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。別々の Oracle ホーム・ディレクトリを使用していれば、同じシステムに複数の Oracle HTTP Server をインストールできます。

Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストール手順

Oracle Database 10g Companion CD 製品をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 最初に Oracle Workflow Server が Oracle Database 10gProducts インストール・タイプからインストールされたことを確認し、Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行して Oracle Workflow を構成します。
2. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
3. 環境変数 ORACLE_HOME があれば、これを削除します。環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意: 環境変数 ORACLE_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

4. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、companion ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリに移動します。

同じインストール・メディアを使用して、サポートされるすべての Windows プラットフォームに Oracle Database をインストールします。
5. setup.exe をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
6. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
7. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Companion Products」を選択して「次へ」をクリックします。

8. 「ホームの詳細の指定」ウィンドウで、次のようにします。
 - a. **名前** : 新しい Oracle ホームの名前を入力します。Oracle Database Companion Products を新規の Oracle ホームにインストールするか、または Oracle Workflow 中間層のみを既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールできます。既存の Oracle Database ホームには Oracle Database Companion Products をインストールできません。
 - b. **パス** : Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。ディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によりそのディレクトリが作成されます。空白を含むディレクトリ・パスは入力しないでください。正しいディレクトリ・パスを入力した後、Oracle Universal Installer により新規ディレクトリが作成されます。

関連項目 : 正しい Oracle ホームの確認方法の詳細は、3-9 ページの「[Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別](#)」を参照してください。

9. 「次へ」をクリックします。
10. 「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで、次のいずれかの製品を選択して「次へ」をクリックします。
 - **Apache Standalone** (このオプションは Oracle HTTP Server をインストールする場合に選択します。)
 - **Oracle Workflow Middle Tier**

注意 : Oracle Workflow 中間層を新規の Oracle ホームにインストールする場合は、Oracle HTTP Server を選択する必要があります。

11. 「製品固有の前提条件のチェック」ウィンドウでは、Oracle Universal Installer によってシステムがチェックされている間に発生する可能性のあるエラーを確認し、エラーがあった場合は修正します。

Oracle Workflow 中間層を既存の Oracle HTTP Server ホームのみにインストールする場合は、選択した Oracle ホームが要件を満たしているかどうか手動で確認することが必要となる場合があります。

12. 「次へ」をクリックします。
13. 「Oracle Workflow 中間層の構成」ウィンドウで、Oracle Workflow 中間層で必要な構成設定を指定します。

Oracle Workflow 中間層を構成するには、mod_plsql 構成ファイルにデータベース・アクセス記述子 (DAD) を作成し、Oracle HTTP Server 構成ファイルにディレクトリ別名を作成する必要があります。Oracle Universal Installer は、この手順で指定する情報を使用してこれらの作業を完了します。

次の情報を入力します。

- **ワークフロー・スキーマ**

データベースに Oracle Workflow Server のデータベース・オブジェクトをインストールする際に使用したユーザー名 (スキーマ名) を指定します。デフォルトのユーザー名は owf_mgr です。

- **DB ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなくコンピュータの名前 (myserver.us.mycompany.com など) を入力します。

■ ポート番号

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。この情報は、Oracle データベースの `tnsnames.ora` ファイルにあります。デフォルトのインストールでは、このファイルは `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin` にあります。

■ Oracle SID

Oracle Workflow Server のデータベース・オブジェクトをインストールしたデータベースのデータベース・インスタンス識別子 (SID) を指定します。

14. 「Oracle Workflow 中間層の構成」ウィンドウで、前の手順で作成した Oracle Workflow スキーマのパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。
15. 「Oracle Apache のインストール」ウィンドウで、Oracle Workflow 中間層の構成に必要な次の情報を入力して「次へ」をクリックします。

■ パスワードを入力

前のウィンドウで指定した Workflow ユーザー（通常は `OWF_MGR`）のパスワードを指定します。このパスワードは、`mod_plsql` のデータベース・アクセス記述子で使用されます。

■ パスワードの確認

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

16. 「サマリー」ウィンドウで、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
17. インストールの終了ウィンドウで、Oracle HTTP Server で使用される URL を控えておきます。

注意：URL は

`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\Apache\setupinfo.txt` ファイルにもリストされています。

18. 「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
19. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、`OraInstalldate_time` ディレクトリを削除します。`OraInstalldate_time` ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。このディレクトリは、TEMP 環境変数に設定されている場所に作成されます。

コンピュータを再起動した場合も、`OraInstalldate_time` ディレクトリが削除されません。

20. Oracle HTTP Server を再起動します。次に例を示します。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目：

- 5-2 ページの「Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動」
- Oracle HTTP Server のインストール後に完了する必要がある作業の詳細は、第 4 章「Oracle Database Companion CD インストール後の作業」を参照してください。

Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle データベースからの Oracle HTML DB の削除](#)
- [Oracle Workflow の削除](#)
- [Oracle Database Products および Oracle Database Companion CD 製品の削除](#)

Oracle データベースからの Oracle HTML DB の削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle HTML DB を削除した後、Oracle HTML DB をデータベースから削除できます。次の指示に従うと、システムにインストールした以前のバージョンの HTML DB が機能しなくなることにご注意ください。

1. SYS や SYSTEM など、権限のあるユーザーでデータベースに接続します。次に例を示します。

```
c:\> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
SQL> ALTER SESSION SET current_schema = FLOWS_010600;  
SQL> EXEC wwv_flow_upgrade.drop_public_synonyms;  
SQL> ALTER SESSION SET current_schema = SYSTEM;  
SQL> DROP USER FLOWS_010600 CASCADE;  
SQL> DROP USER flows_files CASCADE;  
SQL> DROP USER htmldb_public_user CASCADE;
```

Oracle Workflow の削除

Oracle Workflow を削除する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を使用して Oracle Workflow Server または Oracle Workflow 中間層コンポーネントを削除します。

関連項目： 3-19 ページの「[Oracle Database Products および Oracle Database Companion CD 製品の削除](#)」

2. データベースから Oracle Workflow スキーマを削除します。

SYS ユーザーでデータベースにログインします。

```
c:\> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
```

次の DROP USER コマンドを入力します。たとえば、Oracle Workflow スキーマの名前が owf_mgr の場合は、次のように入力します。

```
SQL> drop user owf_mgr cascade
```

Oracle Database Products および Oracle Database Companion CD 製品の削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle ソフトウェアを削除する手順は、次のとおりです。

注意： Oracle ソフトウェアの削除には、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。Oracle Universal Installer を使用して先にソフトウェアを削除してから、Oracle ホーム・ディレクトリを削除してください。

Oracle HTTP Server および Oracle Process Manager and Notification サービスを停止します。

関連項目： 5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「製品の削除」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
3. 「インベントリ」ウィンドウで、削除する Oracle ホームと Oracle 製品を選択します。
4. 特定の製品を削除するには、ツリー・ウィンドウでその製品を選択します。
5. 「削除」をクリックします。
選択した製品と依存コンポーネントを削除してよいか、確認する画面が表示されます。
6. 「はい」をクリックします。
進行状況が表示されます。

Oracle Database Companion CD インストール後の作業

この章では、ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある次の作業について説明します。

- [最新のパッチ・セット・リリースのインストール](#)
- [Oracle HTTP Server のインストール後の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール後の作業](#)
- [Oracle Workflow Server のインストール後の作業](#)

最新のパッチ・セット・リリースのインストール

Oracle Companion CD コンポーネントを正しくインストールした後、最新のパッチ・セットをインストールすることをお勧めします。パッチ・セットをインストールすることで、最新の Oracle Database Companion CD に更新されます。

OracleMetaLink を使用するには、オンライン登録が必要です。OracleMetaLink にログインした後、左側の列から「Patches」を選択します。

パッチを検索してダウンロードする手順は、次のとおりです。

1. OracleMetaLink の Web サイトにアクセスします。

`https://metalink.oracle.com/`

2. OracleMetaLink にログインします。

注意： OracleMetaLink にユーザー登録していない場合は、「**Register for MetaLink!**」をクリックし、表示される指示に従って登録してください。

3. OracleMetaLink のメイン・ページで「Patches」をクリックします。
4. 「Simple Search」を選択します。
5. 次の情報を指定し、「Go」をクリックします。
 - 「Search By」フィールドで「Product」または「Family」を選択し、次に Companion CD 製品を指定します。
 - 「Release」フィールドで、現行のリリース番号を指定します。
 - 「Patch Type」フィールドで、Patchset/Minipack を指定します。
 - 「Platform or Language」フィールドで、使用しているプラットフォームを選択します。
6. 「Results for Platform」の下で、OracleMetaLink を使用して Oracle Database の最新のパッチ・セットを検索します。
7. 使用可能なパッチのリストから、ダウンロードするパッチ番号をクリックします。
8. 「View ReadMe」をクリックし、README を確認してからダウンロードを実行します。

各パッチには、インストール要件および指示が記載された README ファイルがあります。一部のパッチは Oracle Universal Installer でインストールします。その他のパッチには特別な手順が必要です。作業を進める前に、必ず README を読むことをお勧めします。
9. 「Patch Set」ページに戻り、「Download」をクリックしてファイルをシステムにダウンロードして保存します。
10. unzip ユーティリティを使用してパッチ zip ファイルを解凍します。

Oracle HTTP Server のインストール後の作業

Oracle HTTP Server をインストールした場合は、次の項で説明する作業を完了してください。
次の項目について説明します。

- ファイルのバックアップ
- 以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行
- 以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行
- mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行
- Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化

ファイルのバックアップ

Oracle HTTP Server の構成ファイルおよびログ・ファイルのバックアップを作成することをお勧めします。構成ファイルとログ・ファイルは次の場所にあります。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\conf
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\logs
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\Apache\logs
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\conf
```

パッチを適用する前に、Oracle ホーム全体のバックアップを作成することをお勧めします。

以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行

このシステム上で、以前のリリースの Oracle Database とともにインストールされた Oracle HTTP Server を使用している場合は、その HTTP Server の構成を現行のリリースに移行できます。

移行プロセスには次の 2 つの作業が含まれます。

- 以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行
- mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行

以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server の構成を現行リリースに移行するには、以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルをコピーして変更する必要があります。

次の各項では、この作業の実行方法について説明します。

- 手順 1: httpd.conf ファイルをコピーして開く
- 手順 2: 一括変更を実行する
- 手順 3: LoadModule のディレクティブ・リストを変更する
- 手順 4: サポートされない機能のディレクティブとセクションを削除する
- 手順 5: ポート番号を変更する
- 手順 6: 既存のセクションとディレクティブを変更する
- 手順 7: 新規のセクションとディレクティブを追加する
- 手順 8: サーバー証明書と秘密鍵を移行する
- 手順 9: Secure Socket Layer セクションとディレクティブの変更
- 手順 10: 必須ファイルを新規ディレクトリにコピーまたは移動する

手順 1: httpd.conf ファイルをコピーして開く

以前のリリースで使用されている Oracle HTTP Server 構成ファイル (httpd.conf) を、現行リリースの構成ファイル・ディレクトリにコピーします。

httpd.conf ファイルをコピーして開く手順は、次のとおりです。

1. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
c:¥> cd ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf
```
2. httpd.conf ファイルのバックアップを作成します。

```
c:¥> copy httpd.conf httpd.conf.orig
```
3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリのバックアップを作成します。

```
c:¥> copy ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME
```
4. 構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
c:¥> cd ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf
```
5. 以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行のディレクトリにコピーします。次に例を示します。

```
c:¥> copy ¥OLD_ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf
```
6. テキスト・エディタで httpd.conf ファイルを開きます。

手順 2: 一括変更を実行する

httpd.conf ファイルに対して一括変更を実行する手順は、次のとおりです。

1. 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリ・パスの出現箇所をすべて検索し、現行の Oracle ホーム・ディレクトリ・パスに置き換えます。
2. mod_ssl.c の出現箇所をすべて mod_oss1.c に変更します。

注意： SSL を使用していない場合にも、httpd.conf ファイル内の SSL 関連ディレクティブを変更することをお勧めします。

手順 3: LoadModule のディレクティブ・リストを変更する

LoadModule ディレクティブのリストを変更する手順は、次のとおりです。

1. 次のディレクティブを削除します。

```
LoadModule opprocmgr_module    libexec¥libopprocmgr.so
LoadModule rewrite_module      libexec¥mod_rewrite.so
```

注意： このファイルには、後で mod_rewrite モジュール用の LoadModule ディレクティブを追加する必要があります。

2. onsint モジュールをロードする次のディレクティブを、<IfDefine SSL> セクションの直前に追加します。

```
LoadModule onsint_module      libexec¥mod_onsint.so
```

3. <IfDefine SSL> セクションの LoadModule ディレクティブ内で、次のように ssl_module を oss1_module に変更し、mod_ssl.so を mod_oss1.so に変更します。

```
LoadModule oss1_module      libexec¥mod_oss1.so
```

手順 4: サポートされない機能のディレクティブとセクションを削除する

サポートされない機能に関するディレクティブとセクションすべてを削除する手順は、次のとおりです。

1. <IfModule mod_alias.c> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
Alias /jservdocs/ "¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Jserv¥docs¥"
Alias /soapdocs/ "¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥soap¥"
```

2. <IfModule mod_fastcgi> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
FastCGIServer fcgi-bin/echo -initial-env ORACLE_HOME ¥
                        -initial-env NLS_LANG
```

3. 次のインクルード・ディレクティブを削除します。

```
include "/ORACLE_BASE/ORACLE_HOME/Apache/Jserv/etc/jserv.conf"
```

4. <IfModule mod_oprocmgr.c> セクションを削除します。

手順 5: ポート番号を変更する

httpd.conf ファイルは、Oracle HTTP Server または Oracle Database とともにインストールされた以前のリリースの Oracle HTTP Server によって使用されます。このファイルには、SSL 対応サーバーを起動したかどうかに基づいて非 SSL (HTTP) リクエスト用に異なるポートが指定されています。次の例では、これらのポートが *port1* および *port2* として示されています。

```
Port port1
Listen port1
```

```
<IfModule mod_ssl.c>
    Port port2
    Listen port2
    Listen SSL_port
</IfModule>
```

ポート番号を変更する手順は、次のとおりです。

1. SSL を使用していなかった場合は、次のディレクティブを削除します。

```
Port port2
Listen port2
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストを *port1* ポートでリスニングします。

2. SSL 用に定義されたポートのみを使用していた場合は、各ディレクティブを次の例に示すように変更します。

```
Port port2
Listen port2
```

```
<IfModule mod_ssl.c>
    Listen SSL_port
</IfModule>
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストを *port2* ポート、HTTPS リクエストを *SSL_port* ポートでリスニングします。

3. 以前のリリースの Oracle HTTP Server をこのリリースと並行して使用し続ける場合は、Port および Listen ディレクティブに指定されているポートを未使用のポートに変更します。
4. 前述の手順で *SSL_port* を変更した場合は、次のようにします。

- a. <VirtualHost _default_:SSL_port> ディレクティブを検索し、*SSL_port* の値が <IfModule mod_ssl.c> セクションの Listen ディレクティブに指定されている値と一致することを確認します。
- b. <VirtualHost _default_:SSL_port> セクションで、Port ディレクティブに指定されているポート番号が *SSL_port* と同じであることを確認します。

手順 6: 既存のセクションとディレクティブを変更する

httpd.conf のセクションとディレクティブを変更する手順は、次のとおりです。

1. デフォルト・ディレクトリのセクション `<Directory />` で、Options ディレクティブに MultiViews オプションを追加します。次に例を示します。

```
<Directory />
    Options FollowSymLinks MultiViews
    AllowOverride None
</Directory>
```

2. `<IfModule mod_alias.c>` セクションに新しい `<IfModule mod_perl.c>` セクションを作成し、このセクションに `/perl/` の別名を定義する Alias ディレクティブを移動します。次に例を示します。

```
<IfModule mod_alias.c>
...
    <IfModule mod_perl.c>
        Alias /perl/ "%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\Apache%\Apache%\cgi-bin%"
    </IfModule>
...
</IfModule>
```

3. `<IfModule mod_dms.c>` セクションを次の例のように変更します。hostname および domain 変数を適切な値に置き換えます。

```
<IfModule mod_dms.c>
    <Location /dms0>
        SetHandler dms-handler
        Order deny,allow
        Deny from all
        Allow from localhost hostname.domain hostname
    </Location>
</IfModule>
```

4. PERL5LIB 環境変数を設定するディレクティブで、Perl ディレクトリの位置とバージョンを次の例のように編集します。

```
SetEnv PERL5LIB "%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\lib;%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\perl\site\5.6.1\lib"
```

この設定は 1 行で入力してください。

手順 7: 新規のセクションとディレクティブを追加する

http.conf ファイルに新規のセクションとディレクティブを追加する手順は、次のとおりです。

1. 次のセクションを追加して WEB-INF ディレクトリを保護します。

```
#Protect WEB-INF directory

<DirectoryMatch /WEB-INF/>
    Order deny,allow
    Deny from all
</DirectoryMatch>
```

2. oracle_apache.conf ファイルをインクルードする行の前に次の行を追加します。

```
# Include the configuration files needed for mod_oc4j
include "%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\Apache%\Apache%\conf\mod_oc4j.conf"

# Loading mod_rewrite module here as it loads before mod_oc4j
LoadModule rewrite_module modules/ApacheModuleRewrite.dll
```

手順 8: サーバー証明書と秘密鍵を移行する

SSL を使用しており、既存のサーバー証明書と秘密鍵がある場合は、このリリースの Oracle HTTP Server でそれらを使用する前に、`mod_ssl` で必要な書式に移行する必要があります。

既存のサーバー証明書と秘密鍵を移行する手順は、次のとおりです。

1. 次の構文を使用したコマンドを別の端末ウィンドウに入力します。

```

¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥bin¥ssl2oss1 -cert cert_file ¥
                    -key key_file ¥
                    {[ -chain chain_file] |
                    [ -cafile CA_file] |
                    [ -capath CA_path] }¥
                    -wallet wallet_path ¥
                    [ -certpass key_file_pwd]
                    [ -wltpass wallet_pwd] ¥
                    [ -ssowallet yes] ¥
                    [ -validate yes]

```

次の表に、`ssl2oss1` コマンドで使用可能な各オプションの推奨値を示します。

注意： オプション `-chain`、`-cafile`、`-capath` から 1 つ以上を指定する必要があります。

オプション	推奨値
<code>-cert</code>	以前のリリース用の <code>httpd.conf</code> ファイル内で <code>SSLCertificateFile</code> ディレクティブに指定されていた値を使用します。
<code>-key</code>	以前のリリース用の <code>httpd.conf</code> ファイル内で <code>SSLCertificateKeyFile</code> ディレクティブに指定されていた値を使用します。
<code>-chain</code>	以前のリリース用の <code>httpd.conf</code> ファイル内で <code>SSLCertificateChainFile</code> ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意： <code>SSLCertificateChainFile</code> ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、 <code>-chain</code> オプションを指定しないでください。
<code>-cafile</code>	以前のリリース用の <code>httpd.conf</code> ファイル内で <code>SSLCACertificateFile</code> ディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意： <code>SSLCertificateChainFile</code> ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、 <code>-chain</code> オプションを指定しないでください。
<code>-capath</code>	以前のリリース用の <code>httpd.conf</code> ファイル内で <code>SSLCACertificatePath</code> ディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意： <code>SSLCertificateChainFile</code> ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、 <code>-chain</code> オプションを指定しないでください。
<code>-wallet</code>	Wallet を作成するディレクトリへのパスを指定します。デフォルト値は次のとおりです。 ¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥ssl.wlt¥default
<code>-certpass</code>	秘密鍵ファイルが暗号化されている場合は、そのパスワードを指定します。
<code>-wltpass</code>	新規 Wallet のパスワードを指定します。 このオプションを指定しないと、 <code>ssl2oss1</code> ユーティリティでは Wallet パスワードの入力と確認を求めるプロンプトが表示されます。

オプション	推奨値
-ssowallet	Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を作成するには、値 yes を指定します。
-validate	Wallet が正常に変換されるかどうかを検証するには、値 yes を指定します。このオプションに値 yes を指定すると、Wallet は作成されません。

2. オプションで、次のようなコマンドを入力し、`ssl2oss1` コマンドに指定した Wallet パスワードの暗号化バージョンを生成できます。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%Apache%bin%iasofb -p wallet_pwd
```

注意： `ssl2oss1` コマンドで `-ssowallet` オプションを指定した場合、この手順を実行する必要はありません。それ以外の場合は、`httpd.conf` ファイルでパスワードを指定する必要があるため、パスワードは暗号化することをお勧めします。

このコマンドの出力は、`-p` オプションに指定したパスワードの暗号化バージョンです。次の項では、この値を `SSLWalletPassword` ディレクティブに対して指定する必要があります。

手順 9: Secure Socket Layer セクションとディレクティブの変更

注意： 現在 Secure Sockets Layer (SSL) を使用していない場合にも、`httpd.conf` ファイル内の SSL 関連のセクションとディレクティブを変更することをお勧めします。

<IfModule mod_oss1.c> セクションの各ディレクティブを次のように変更します。

1. `SSLSessionCache` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLSessionCache shmcb:/ORACLE_BASE/ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs/
ssl_scache(512000)
```

2. `SSLCipherSuite` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLCipherSuite SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:
SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:
SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5:SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA
```

3. 次のディレクティブとその関連コメントを削除します。

```
SSLRandomSeed
SSLCertificateFile
SSLCertificateKeyFile
SSLCertificateChainFile
SSLCACertificateFile
SSLCACertificatePath
SSLVerifyDepth
```

4. <VirtualHost _default_:SSL_port> セクションに、次の行を追加します。

```
# Server Wallet:
# The server wallet contains the server's certificate, private key
# and trusted certificates. Set SSLWallet at the wallet directory
# using the syntax: file:<path-to-wallet-directory>
SSLWallet file:%ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%Apache%conf%ssl.wlt%default
```

```
# Server Wallet Password:
# Both clear text wallet password and obfuscated password are allowed
# here. An obfuscated one is recommended.
# Examples:
# SSLWalletPassword <clear_pass>
# SSLWalletPassword <obfuscated_pass>
#SSLWalletPassword ...
```

5. サーバー証明書と秘密鍵を移行した場合は、次のようにします。
 - a. SSLWallet ディレクティブにデフォルト以外の値が指定されている場合は、それを変更して Wallet のパスを指定します。
 - b. Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を（前項で `-ssowallet yes` オプションを使用して）作成していない場合は、SSLWalletPassword ディレクティブからコメントを削除し、値としてクリアテキストまたは暗号化形式の Wallet パスワードを指定します。

手順 10: 必須ファイルを新規ディレクトリにコピーまたは移動する

ファイル用のスクリプトを、ドキュメント・ルート・ディレクトリおよびスクリプト・ディレクトリから、新規リリース用の同等のディレクトリにコピー（または移動）します。

以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリのうち、サブディレクトリにあるファイルのみをコピーまたは移動する必要があります。他の位置にある別名ディレクトリは、そのディレクトリと内容に対するアクセス権においてサーバーによる読取りが許可されていれば、引き続きアクセスできます。User または Group ディレクティブを変更した場合は、これらのアクセス権の変更が必要になることがあります。

該当する場合は次のファイルをコピーします。

- DocumentRoot または Alias ディレクティブに指定されているディレクトリ内のファイルとサブディレクトリ
- ScriptAlias ディレクティブに指定されているディレクトリにある CGI、Perl、FastCGI の各プログラム、スクリプトおよびその関連ファイル

mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server を含むデータベースへのアクセスに mod_plsql を使用していた場合は、データベース・アクセス記述子（DAD）を現行リリースの mod_plsql で必要な書式に移行する必要があります。dadTool.pl Perl スクリプトを使用すると、この移行タスクを完了できます。

dadTool.pl スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数に現行リリース用の Oracle ホーム・ディレクトリへのパスを指定し、PATH 環境変数に perl 実行可能ファイルを含むディレクトリと dadTool.pl スクリプトの場所が含まれるように設定します。

次に例を示します。

```
c:¥> set PATH=%ORACLE_BASE%¥%ORACLE_HOME%¥Apache¥modplsql¥conf;
      %ORACLE_BASE%¥%ORACLE_HOME%¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86;%PATH%
```

この設定は 1 行で入力してください。

2. PATH に ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥bin が含まれていない場合は、PATH 文に含めます。

次に例を示します。

```
c:¥> set PATH=c:oracle¥product¥10.1.0¥Db_1¥bin;%PATH%
```

3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する mod_plsql 構成ディレクトリに移動します。

```
c:¥> cd ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥conf
```

4. 以前のリリースで使用されていた DAD 構成ファイル (wdbsvr.app) を、このディレクトリにコピーします。

```
c:¥> copy OLD_ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥cfg¥wdbsvr.app
```

5. 次のコマンドを入力して dadTool スクリプトを実行します。

```
c:¥> perl dadTool.pl -m
```

dadTool スクリプトは、wdbsvr.app ファイルから DAD 情報を読み取って、dads.conf ファイルに同様の DAD を新たに作成します。

Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化

Oracle HTTP Server の高可用性機能を有効にする場合は、Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) を Oracle HTTP Server とともに使用する必要があります。OPMN を使用するには、最初に OPMN サービスを起動します。OPMN サービスと Oracle HTTP Server プロセスを一緒に起動するには、次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥opmn¥bin¥opmnctl startall
```

注意： このリリースでは Oracle HTTP Server の起動と停止については、apachectl スクリプトはサポートされていません。

OPMN サービスが実行中の場合には、Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動できます。

関連項目： 5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」

OPMN サービスと Oracle HTTP Server プロセスを停止するには、次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥opmn¥bin¥opmnctl stopall
```

Oracle HTML DB のインストール後の作業

Oracle HTML DB をインストールした場合は、次の作業を完了してください。

- [プロセスの再起動](#)
- [Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成](#)
- [PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化](#)
- [リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成](#)

プロセスの再起動

インストール前に停止したリスナーや他のプロセスなどのプロセスを再起動します。さらに、Oracle HTTP Server を再起動します。

関連項目： 5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」

Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成

Oracle HTML DB をリリース 1 (10.1) からアップグレードし、最初のインストールで指定したパスワードとインストール時に指定したパスワードが異なる場合は、データベース・アクセス記述子 (DAD) を含むファイルを変更する必要があります。次の項では、使用する環境で Oracle HTTP Server のタイプによって変更が必要なパラメータを説明します。

次の項目について説明します。

- [Oracle HTTP Server リリース 9.0.3](#)
- [Oracle HTTP Server 10g リリース 1](#)

注意： 次の作業は、初期インストールで指定したパスワードが今回のインストールで指定したパスワードと異なる場合のみ実行してください。

Oracle HTTP Server リリース 9.0.3

Oracle HTML DB をアップグレードしていて、Oracle Database リリース 9.2.0.x に付属しているバージョンの Oracle HTTP Server を実行している場合は、`wdbsvr.app` ファイルのパラメータ `password` を変更する必要があります。

`wdbsvr.app` ファイルのパラメータ `password` を変更する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して `wdbsvr.app` ファイルを開きます。
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\cfg\wdbsvr.app`
2. 次のものを検索することによって、Oracle HTML DB の DAD 設定を検索します。
`DAD_htmladb`
3. インストール時に指定したパスワードと一致するように `password` パラメータの横の値を編集します。
4. 変更内容を保存します。
5. Oracle HTTP Server を停止して再起動します。
 - Oracle HTTP Server の停止：「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - OraHome」→「Oracle HTTP Server」→「Stop HTTP Server」を選択します。
 - Oracle HTTP Server の再起動：「スタート」メニューから、「Oracle - OraHome」→「Oracle HTTP Server」→「Start HTTP Server」を選択します。

関連項目：『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

Oracle HTTP Server 10g リリース 1

Oracle HTML DB をアップグレードして、Oracle HTTP Server 10g リリース 1 を実行する場合は、`marvel.conf` ファイルのパラメータ `PlsqlDatabasePassword` を変更する必要があります。

`marvel.conf` ファイルのパラメータ `PlsqlDatabasePassword` を変更するには、次のようにします。

1. テキスト・エディタを使用して `marvel.conf` ファイルを開きます。
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\conf\marvel.conf`
2. 次のものを検索することによって、Oracle HTML DB の DAD 設定を検索します。
`/pls/htmladb`
3. インストール時に指定したパスワードと一致するように `PlsqlDatabasePassword` パラメータの値を変更します。
4. 変更内容を保存します。

5. Oracle HTTP Server を停止して再起動します。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目： 4-12 ページの「[PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化](#)」
および『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化

PlsqlDatabasePassword パラメータは、データベースにログインするためのパスワードを指定します。dads.conf ファイルのパスワードを不明瞭化するには、dadTool.pl スクリプトを使用できます。

dadTool.pl スクリプトは次のディレクトリにあります。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%modplsql%conf
```

新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化

新しい Oracle HTML DB インストールでは、PlsqlDatabasePassword パラメータは dads.conf ファイルにあります。新しいインストールでパスワードを不明瞭化するには、dadTool.README ファイルの指示に従って dadTool.pl ユーティリティを実行します。

Oracle HTML DB のアップグレードでのパスワードの不明瞭化

以前のリリースの Oracle HTML DB からアップグレードした場合は、DAD 情報は marvel.conf ファイルにあります。dadTool.pl スクリプトを実行するためには、DAD エントリを marvel.conf ファイルから dads.conf ファイルにコピーする必要があります。

アップグレード時にパスワードを不明瞭化する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタで marvel.conf ファイルから次の場所にある dads.conf ファイルに /pls/htmldb のエントリをコピーします。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%modplsql%conf%dads.conf
```

2. dadTool.README ファイルの指示に従って dadTool.pl を実行します。
3. /pls/htmldb のエントリを dads.conf ファイルから marvel.conf にコピーして戻します。
4. /pls/htmldb のエントリを dads.conf ファイルから削除します。

リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成

htmldbca コマンドライン・ツールを使用して、次のアクティビティを実行できます。

- リモートの Oracle データベースでの Oracle HTML DB のインストールおよび構成
- リモートの Oracle データベースでの既存の Oracle HTML DB のアップグレード
- リモートの Oracle データベースでの既存の Oracle HTML DB への言語の追加

htmldbca の実行要件

htmldbca を実行するには、次の要件を満たす必要があります。

- **HTML DB がインストールされているローカルへの Oracle Database Companion CD のインストール。**htmldbca 実行可能ファイルは、Oracle HTML DB と同じ Oracle ホームの bin ディレクトリにあります。
- **リモートの Oracle データベース。**このデータベースは、リモート・コンピュータの Oracle HTML DB ホームまたは Oracle データベース・インストールと同じコンピュータ上に配置できます。このリモートの Oracle データベース・インストールへの有効な接続が必要です。
- **リモートの Oracle データベースへの接続権限。**SYSDBA ロールを使用して SYS で接続する必要があります。htmldbca によって、SYS ユーザーのパスワードを求めるプロンプトが表示されます。

関連項目：別の Oracle データベースへの接続方法については、『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

htmldbca の構文

htmldbca の構文は、次のとおりです。

htmldbca [*options*]

options は、次のように指定します。

- **-oracle_home string:** Oracle HTML DB をインストールする Oracle ホームの位置を入力します。この Oracle ホームを指定しないと、htmldbca では、ORACLE_HOME 環境変数の設定を使用します。ORACLE_HOME が未設定または使用不可で、oracle_home オプションを指定しないと、Oracle ホームの入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。このオプションは必須です。次に例を示します。

```
htmldbca -oracle_home c:\oracle\product\10.2.0\db_2
```

- **-db_host 文字列:** リモート Oracle Database のホスト名を指定します。このオプションは必須です。指定しないと、入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。次に例を示します。

```
htmldbca -db_host shobeen
```

- **-db_servicename 文字列:** Oracle Database サービス名を指定します。このオプションは必須です。指定しないと、入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。次に例を示します。

```
htmldbca -db_servicename welcome
```

- **sys_password | -sys_obfuscatedPassword 文字列:** SYS のリモート・パスワードまたは不明瞭化されたパスワードを指定します。このオプションは必須です。いずれかのパラメータを指定しないと、sys_password の入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。その場合、sys_obfuscatedPassword はオプションになります。次に例を示します。

```
htmldbca -sys_password welcome
```

- **-htmldb_password | -htmldb_obfuscatedPassword 文字列:** Oracle HTML DB のパスワードまたは不明瞭化されたパスワードを指定します。Oracle HTML DB のパスワードまたは不明瞭化されたパスワードです。このオプションは必須です。いずれかのパスワードを指定しないと、htmldb_password の入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。(以前のバージョンの Oracle HTML DB からアップグレードしている場合は、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマのそのバージョンに対して作成したパスワードを入力します。) 次に例を示します。

```
htmldbca -htmldb_password htmldb_welcome
```

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に管理ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマにも

使用され、`mod_plsql` がそのパスワードを使用してデータベースに接続します。また、`FLows_010600` スキーマおよび `FLows_FILES` スキーマにも使用されます。

インストール後にパスワードを不明瞭化する場合は、4-12 ページの「[新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化](#)」を参照してください。

- `-ts_htmlldb string`: リモート HTML DB に作成する HTML DB 表領域の名前を指定します。このオプションは必須です。指定しないと、入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。次に例を示します。

```
htmldbca -ts_htmlldb sysaux
```

- `-ts_files` 文字列: Oracle HTML DB ファイルの表領域を指定します。デフォルトでは、`htmldbca` によって `ts_htmlldb` の値が使用されます。このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。次に例を示します。

```
htmldbca -ts_files sysaux
```

- `-ts_temp` 文字列: Oracle HTML DB の一時表領域を指定します。デフォルト値は、`temp` 表領域を使用するように設定されます。このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。
- `-load_lang` 文字列 [, 文字列 [, 文字列 [...]]]: インストールする 1 つ以上の追加言語を指定します。このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。(プロンプトが表示された場合、入力できる言語は 1 つのみです。) 値を入力しないと、英語が選択されます。次に例を示します。

```
htmldbca -load_lang de, fr, it
```

言語の選択肢は、次のとおりです。

- de: ドイツ語
- en: 英語 (これがデフォルトです。英語バージョンの Oracle HTML DB がリモート Oracle データベースにすでにインストールされている場合、`htmldbca` は通知メッセージを表示して終了します。)
- es: スペイン語
- fr: フランス語
- it: イタリア語
- ja: 日本語
- ko: 韓国語
- pt-br: ポルトガル語 (ブラジル)
- zh-cn: 中国語 (北京)
- zh-tw: 中国語 (台湾)

Oracle Database の言語サポートの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

- `-DAD_name string`: Oracle HTML DB の新しいデータベース・アクセス記述子名を作成します。デフォルト値は `htmlldb` です。`htmldbca` は、新しい DAD 値を使用して `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\conf\marvel.conf` ファイルを更新します。このオプションは必須ではありませんが、重複する値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。変更内容を有効にするには、Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。その際は、次の項に説明されている `-restart` パラメータを使用できます。次に例を示します。

```
htmldbca -DAD_name my_htmlldb -restart
```

あるいは、htmldbca を実行した後、コマンド・プロンプトから次のコマンドを入力して Oracle HTTP Server を再起動できます。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

その後、次の構文を使用して URL を入力すると、このインスタンスにアクセスできます。

```
http://host:port/pls/DAD_name
```

次に例を示します。

```
http://mycompany:7778/pls/my_html
```

- **-restart:** 構成を完了した後、Oracle HTTP Server を再起動します。これはオプションで、省略した場合もプロンプトは表示されません。次に例を示します。

```
htmldbca -restart
```

- **-interactive on|off:** 対話モードをオンまたはオフに切り替えます。対話モードがオンで、パラメータ値が欠落または無効な場合は、htmldbca によってプロンプトが表示されます。対話モードがオフの場合、プロンプトは表示されません。したがって、htmldbca を実行する場合は、必要なすべてのプロンプト値をコマンドラインに指定する必要があります。デフォルトでは、htmldbca は対話モードで実行されます。これはオプションで、省略した場合もプロンプトは表示されません。次に例を示します。

```
htmldbca -interactive off
```

- **-help:** htmldbca の使用方法の簡単な説明が表示されます。これはオプションで、省略した場合もプロンプトは表示されません。次に例を示します。

```
htmldbca -help
```

htmldbca の実行

htmldba を実行するには、Windows コマンドプロンプトを開き、htmldba コマンドのみで、または前述の項に記載されているオプションの組合せを使用して実行します。次に例を示します。

```
c:\> htmldbca
```

-interactive モードがオフに設定されていない場合は、実行に必要な情報をコマンドラインに指定しないと、入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。

Oracle Workflow Server のインストール後の作業

次の項目について説明します。

- [初期化パラメータの値の確認](#)
- [無効なオブジェクトのコンパイル](#)
- [Oracle Workflow HTML のヘルプの構成](#)
- [その他の設定作業の完了](#)

初期化パラメータの値の確認

次の表に記載されている初期化パラメータが、必要な値以上に設定されていることを確認します。必要に応じて、値を変更してください。

注意： 現行の値が必要な値より大きい場合、現行の値は変更しないでください。

パラメータ	必要な値
AQ_TM_PROCESSES	1 よりも大きい値
JOB_QUEUE_PROCESSES	10 以上の値

これらの初期化パラメータの値を確認し、必要に応じて変更する手順は、次のとおりです。

1. SYS ユーザーでデータベースにログインします。

```
c:\> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
```
2. すべての初期化パラメータの現行の値を確認するには、次のコマンドを入力します。

```
SQL> SHOW PARAMETER parameter_name
```
3. 初期化パラメータの値を変更するには、次のようなコマンドを入力します。

```
SQL> ALTER SYSTEM SET parameter_name=value
```
4. データベースがサーバー・パラメータ・ファイルを使用していない場合、初期化パラメータ・ファイル (init.ora) でパラメータに指定した値を編集します。

無効なオブジェクトのコンパイル

SYS スキーマの無効なオブジェクトをコンパイルするには、Oracle データベースにログインして utlrp.sql スクリプトを実行します。次に例を示します。

```
c:\> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
SQL> @C:\oracle\product\10.2.0\db_1\rdbms\admin\utlrp.sql
```

Oracle Workflow HTML のヘルプの構成

Oracle Workflow では各 Web ページの「ヘルプ」ボタンから状況依存 HTML ヘルプにアクセスできます。Oracle Workflow の HTML ヘルプを表示するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\wfdoc.zip` ファイルからファイル・システムに doc ディレクトリ・ツリーを展開する必要があります。

wfdoc.zip ファイルを展開する手順は、次のとおりです。

1. unzip ユーティリティを使用して中間層 Oracle ホームの Workflow ディレクトリ内の zip ファイルから doc ディレクトリ・ツリーを展開します。
この抽出には、最低 5 MB の空きディスク領域が必要です。doc ディレクトリ・ツリーを展開後、オプションで wfdoc.zip ファイルを削除できます。
2. Oracle Workflow の Web ページで「ヘルプ」ボタンをクリックして HTML ヘルプにアクセスします。

Web リスナー・ベースの URL に仮想パスを追加して、直接 HTML ヘルプ・ファイルにアクセスすることもできます。Oracle Workflow ヘルプのコンテンツ・ページのパスは次のとおりです。

```
http://hostname:portID/OA_DOC/lang/wf/toc.htm
```

3. オプションで、カスタム・ヘルプを追加する場合は、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\doc\lang\wfcust` ディレクトリのプレースホルダ・ファイルの `wfcust.htm` を独自のヘルプ資料に置き換えられます。

カスタム・ヘルプのメイン・エントリ・ポイントである HTML ファイルの名前は `wfcust.htm` で、`contents` という名前のアンカーを含む必要があります。カスタム・ヘルプには、Oracle Workflow ヘルプのコンテンツ・ページの「**カスタム・ヘルプ**」リンクからアクセスできます。また、次のパスを使用して直接カスタム・ヘルプにアクセスできます。

`http://hostname:portID/OA_DOC/lang/wfcust/wfcust.htm`

その他の設定作業の完了

Oracle Workflow Server および中間層のインストール・プロセスを完了した後は、Oracle Workflow をサイト用に設定するための追加の手順を実行する必要があります。

関連項目：これらの作業を完了する手順は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項を参照してください。

Oracle Database Companion CD 製品の スタート・ガイド

この章では、Oracle Database Companion CD 製品をインストールした後の操作について説明します。

- [インストール内容のチェック](#)
- [Oracle HTTP Server のスタート・ガイド](#)
- [Oracle HTML DB のスタート・ガイド](#)
- [Oracle Workflow のスタート・ガイド](#)
- [Oracle Ultra Search のスタート・ガイド](#)

注意：Windows Vista では、Oracle Universal Installer および Oracle Process Management Notification (OPMN) などのユーティリティには Administrator 権限が必要です。

インストール内容のチェック

Oracle ソフトウェアのインストール内容は、Oracle Universal Installer を使用して次の手順でチェックできます。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
Oracle ホームから Oracle Universal Installer へアクセスできます。
2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。製品のパスをチェックするには、「環境」タブをクリックします。

Oracle HTTP Server のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)
- [Oracle HTTP Server へのログイン](#)

Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動

Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle HTTP Server」を選択します。
2. 適切なオプションを選択します。
 - Oracle HTTP Server の起動
 - Oracle HTTP Server の停止

かわりに、コマンド・プロンプトを開いて次のコマンドを実行します。

- Oracle HTTP Server を起動するには、次のようにします。
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server`
- Oracle HTTP Server を再起動するには、次のようにします。
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server`
- Oracle HTTP Server を停止するには、次のようにします。
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server`

Oracle HTTP Server へのログイン

Oracle HTTP Server にログインするには、ブラウザで次の構文を使用して URL を入力します。

`http://server:port/`

各項目の意味は次のとおりです。

- `server` は、Oracle HTTP Server をインストールしたコンピュータで、たとえば `mycomputer.us.mycompany.com` となります。
- `port` は、Oracle HTTP Server に割り当てられているポート番号です。デフォルトのインストールではこの番号は 7777 です。Oracle HTTP Server のインストールのポート番号に関する情報は、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf` にある `httpd.conf` ファイルで `Port` を検索して確認できます。

また、ポート番号は、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\install` にある `portlist.ini` ファイルでも確認できます。ただし、ポート番号を変更したとき、`portlist.ini` ファイ

ルの内容は更新されないため、このファイル内の情報を使用できるのはインストール直後のみです。

ログインすると、このリリースの Oracle HTTP Server 製品のデモと新機能のリストが表示されます。このリンクからは、Oracle Technology Network にもアクセスできます。

Oracle HTML DB のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTML DB へのログイン](#)
- [Oracle HTML DB 管理者の設定作業](#)

Oracle HTML DB へのログイン

Web ブラウザで Oracle HTML DB のホームページを開きます。Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。

関連項目： サポートされている Web ブラウザについては、2-3 ページの「[ブラウザの要件](#)」を参照してください。

Oracle HTML DB 管理サービスにログインする手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザで、Oracle HTML DB 管理サービス・アプリケーションに移動します。

`http://hostname:port/pls/database_access_descriptor/htmldb_admin`

各項目の意味は次のとおりです。

- `hostname` は、Oracle HTTP Server がインストールされているコンピュータの名前です。
- `port` は、Oracle HTTP Server に割り当てられているポート番号です。デフォルトのインストールではこの番号は 7777 です。Oracle HTTP Server のインストールのポート番号に関する情報は、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf` にある `httpd.conf` ファイルで Port を検索して確認できます。

また、ポート番号は、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥install` にある `portlist.ini` ファイルでも確認できます。ただし、ポート番号を変更したとき、`portlist.ini` ファイルの内容は更新されないため、このファイル内の情報を使用できるのはインストール直後のみです。
- `database_access_descriptor` は、`mod_plsql` 構成ファイルで定義されたデータベース・アクセス記述子 (DAD) です。デフォルト値は `htmldb` です。

関連項目： データベース・アクセス記述子の機能の詳細は、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥conf¥dads.readme` を参照してください。

次に例を示します。

`http://myserver.us.mycompany.com:7777/pls/htmldb/htmldb_admin`

ログイン・ページが表示されます。

2. 「ユーザー名」に `admin` と入力します。
3. 「パスワード」に、Oracle HTML DB のインストール時に指定した、Oracle HTML DB 管理者アカウントのパスワードを入力します。
4. 「ログイン」をクリックします。

Oracle HTML DB 管理サービス・ページが表示されます。

Oracle HTML DB 管理者の設定作業

Oracle HTML DB 管理者は、次のことを実行する必要があります。

- **Oracle HTML DB 管理サービスにログインします。** Oracle HTML DB 管理サービスは、Oracle HTML DB インスタンス全体を管理する別のアプリケーションです。
- **プロビジョニング・モードを指定します。** Oracle HTML DB 管理サービスでは、開発環境でのワークスペースの作成（またはプロビジョニング）のプロセスを決める必要があります。
- **ワークスペースを作成します。** ワークスペースとは一意の ID および名前の付いた Oracle HTML DB 開発環境内の共有作業領域です。Oracle HTML DB 管理者は、ワークスペースを手動で作成するか、またはユーザーにリクエストを送信させることができます。
- **ワークスペースにログインします。** Oracle HTML DB 管理サービスでワークスペースを作成した後は、Oracle HTML DB のログイン・ページに戻りそのワークスペースにログインできます。

関連項目： Oracle HTML DB の使用、アプリケーション開発および管理の詳細は、『Oracle HTML DB ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle Workflow のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Workflow のホームページへのログイン](#)
- [Oracle Workflow Manager へのログイン](#)
- [Oracle Workflow 管理者の設定作業](#)

Oracle Workflow のホームページへのログイン

Web ブラウザで Oracle Workflow のホームページを開きます。Workflow ディレクトリ・サービスの有効なユーザーである必要があります。ディレクトリ・サービスは、インストールおよび構成中に選択した設定によって、Oracle Internet Directory か固有のデータベース・ユーザーのいずれかに基づいたものとなります。

関連項目： サポートされている Web ブラウザの一覧は、2-6 ページの「[Oracle Workflow Server のブラウザ要件](#)」を参照してください。

Oracle Workflow ホーム・ページにアクセスするには、有効な Oracle Workflow ユーザーとして次の URL に接続します。

`http://hostname:port/pls/wf/wfa_html.home`

関連項目： 使用するサーバーおよびポート番号がわからない場合は、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥oc4j¥j2ee¥deploy_db_wf.ini` を参照してください。

Oracle Workflow Manager へのログイン

Oracle Workflow Server のインストールには Oracle Enterprise Manager の Oracle Workflow Manager コンポーネントが含まれます。このコンポーネントは、Oracle Workflow の管理ツールを提供します。Oracle Workflow を Oracle Database ホームにインストールすると、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントによって Oracle Workflow Manager が構成されます。ここで、Java 2 Enterprise Edition (OC4J) インスタンス用に、次の 2 つの Oracle Application Server コンテナが作成されます。

- **OC4J_Workflow_Component_Container:** Workflow コンフィギュレーション・アシスタントはこのインスタンス内に 2 つのアプリケーションをデプロイします。1 つはエージェント・リスナー・サービス・コンポーネントを実行するアプリケーションで、もう 1 つは通知メーラー・サービス・コンポーネントを実行するアプリケーションです。
- **OC4J_Workflow_Management_Container:** Workflow コンフィギュレーション・アシスタントはこのインスタンス内に 1 つのアプリケーションをデプロイして Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースを実装します。

OC4J インスタンスの起動、停止および再起動

これらのインスタンスを起動するには、次のスクリプトを実行します。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\admin\wfmgstart.bat
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\admin\wfsvcstart.bat
```

Oracle Workflow Manager にデプロイされている OC4J インスタンスを停止および再起動できます。インスタンスを停止するには、次のスクリプトを実行します。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\admin\wfmgstop.bat
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\admin\wfsvcstop.bat
```

Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースへのアクセス

Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Enterprise Manager Database Control にログインします。
`http://server:port/em`
 次に例を示します。
`http://myserver.mycompany:5500/em`
2. ホームページで、「関連リンク」セクションに移動します。
3. 「関連リンク」セクションで、「ワークフロー・マネージャ」を選択します。
4. Oracle Workflow Manager のデータベース・ユーザー名（通常は `owf_mgr`）とパスワードを使用してログインします。

関連項目：

- 『Oracle Workflow 管理者ガイド』
- 『Oracle Workflow 開発者ガイド』
- 『Oracle Workflow ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Workflow API リファレンス』

Oracle Workflow 管理者の設定作業

Oracle Workflow 管理者は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の章に記載されている作業を実行する必要があります。

関連項目：『Oracle Workflow 管理者ガイド』

Oracle Ultra Search のスタート・ガイド

Oracle Ultra Search をインストールした後は、Oracle Universal Installer によって、Oracle Ultra Search 固有の次の管理アカウントが作成されます。

- WK_TEST: Ultra Search のデフォルトのインスタンス・スキーマ。
- WKPROXY: Ultra Search のプロキシ・ユーザー。
- WKSYS: Ultra Search システム・ディクショナリと PL/SQL パッケージの格納に使用します。

関連項目：『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge のインストール方法について説明します。Java Access Bridge により、Oracle の各コンポーネントでのスクリーン・リーダーの使用が可能になります。

- [概要](#)
- [JRE 1.4.2 の設定](#)
- [インストール済の Oracle コンポーネントの設定](#)

注意：Java Access Bridge および JAWS は今現在 Windows Vista での動作保証はされていません。

概要

Java Access Bridge は、JAWS スクリーン・リーダーなど、Windows プラットフォームで実行中の Java アプリケーションを読み上げるための障害支援技術を使用可能にします。障害支援技術は、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Database Control など、Java ベースのインタフェースを読み上げることができます。

Oracle Database、Oracle Database Client および Oracle Database Companion CD インストール・メディアには、インストール時に Oracle Universal Installer によって使用される Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が含まれています。JRE により、インストール時に Java Access Bridge が使用できるようになります。Oracle コンポーネントのインストール後に Java Access Bridge をインストールおよび構成する方法の詳細は、A-2 ページの「[インストール済の Oracle コンポーネントの設定](#)」を参照してください。

JRE 1.4.2 の設定

JRE 1.4.2 で Java Access Bridge を設定するには、Oracle インストール・メディアにある次のバッチ・ファイルを実行します。

```
DRIVE_LETTER:¥install¥access_setup.bat
```

バッチ・ファイルの実行後に、障害支援技術プログラムを再起動します。

インストール済の Oracle コンポーネントの設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に、Windows 用の Java Access Bridge をインストールし、構成する方法について説明します。次の項目について説明します。

- [Java Access Bridge のインストール](#)
- [Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成](#)

Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge をインストールするには、次のようにします。

1. Oracle インストール・メディアで、AccessBridge ディレクトリに移動します。
2. accessbridge-1_0_4.zip ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムにこのファイルを展開します。次に例を示します。

```
c:¥AccessBridge-1.0.4
```

3. [表 A-1](#) に示した Java Access Bridge ファイルを、Oracle コンポーネントによって使用される JRE 1.4.2 ディレクトリにコピーします。デフォルトでは、Oracle コンポーネントによって使用される JRE は次の場所にインストールされています。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2
```

表 A-1 は、ハード・ドライブ上の Java Access Bridge の場所から、Oracle コンポーネントによって使用される JRE ディレクトリにコピーする必要のあるファイルを示しています。

表 A-1 ファイルの JRE ディレクトリへのコピー

コピーするファイル	コピー先
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% jaccess-1_4.jar	ORACLE_BASE%ORACLE_HOME% jre%1.4.2%lib%ext
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% access-bridge.jar	ORACLE_BASE%ORACLE_HOME% jre%1.4.2%lib%ext
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% JavaAccessBridge.dll	windows_directory% system32
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% WindowsAccessBridge.dll	windows_directory% system32
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% JAWTAccessBridge.dll	windows_directory% system32
%AccessBridge-1_0_4%installer%installerFiles% accessibility.properties	ORACLE_BASE%ORACLE_HOME% jre%1.4.2%lib

4. jaccess-1_4.jar (ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%jre%1.4.2%lib%ext にあります) の名前を jaccess.jar に変更します。
5. インストールに成功すると、次の場所にある Java Access Bridge のドキュメントにアクセスできます。

DRIVE_LETTER:%AccessBridge-1.0.4%doc

Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストールの完了後に、Java Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成できます。それには、システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH を、インストール済の Java Access Bridge ファイルを指すように設定する必要があります。

次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択し、Windows の「システム」コントロールパネルを表示します。
2. 「詳細」タブを選択します。
3. 「環境変数」ボタンをクリックします。
4. 「システム環境変数」リストの下に「新規」ボタンをクリックします。「新しいシステム変数」ダイアログが表示されます。
5. 「変数名」フィールドに、ORACLE_OEM_CLASSPATH と入力します。
6. 「変数値」フィールドに、jaccess.jar および access-bridge.jar へのフル・パスを入力します。

2 つのパスはセミコロンで区切ります。引用符や空白文字を使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルトの場所にインストールされている場合、設定は次のようになります。

ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%jre%1.4.2%lib%ext%jaccess.jar;ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%jre%1.4.2%lib%ext%access-bridge.jar

7. 「OK」をクリックします。

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール

この付録の内容は、次のとおりです。

- [レスポンス・ファイルの使用方法](#)
- [レスポンス・ファイルの準備](#)
- [レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)
- [非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行](#)

レスポンス・ファイルの使用法

Oracle Universal Installer の起動時にレスポンス・ファイルを指定することで、Oracle ソフトウェアのインストールおよび構成を完全または部分的に自動化できます。Oracle Universal Installer では、一部またはすべてのプロンプトに対する応答にレスポンス・ファイル内の値が使用されます。

通常、Oracle Universal Installer は対話型モードで実行されます。つまり、グラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）画面で情報の入力要求されます。レスポンス・ファイルを使用してこの情報を入力する場合は、次のいずれかのモードでコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行します。

- **サイレント・モード**: Oracle Universal Installer 画面は一切表示されません。かわりに、Oracle Universal Installer を起動したコマンド・ウィンドウに進捗情報が表示されます。サイレント・モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定して `setup.exe` を実行し、Oracle Universal Installer プロンプトに対する応答を含むレスポンス・ファイルを組み込みます。
- **非対話型（または抑制）モード**: レスポンス・ファイルに情報が入力されていない画面のみが表示されます。また、レスポンス・ファイルまたはコマンドライン・プロンプト内の変数を使用して、情報の入力を求めない他の Oracle Universal Installer 画面（「ようこそ」画面や「サマリー」画面など）を非表示にできます。非対話型モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定せずに `setup.exe` を実行します。ただし、レスポンス・ファイルまたは適用する他のパラメータは組み込みます。

レスポンス・ファイルにリストされている変数に値を入力して、サイレントまたは非対話型インストールの設定を定義します。たとえば、Oracle ホーム名を指定するには、次の例に示すように、`ORACLE_HOME_NAME` 変数に適切な値を入力します。

```
ORACLE_HOME_NAME="OraDBHome1"
```

レスポンス・ファイルの変数の設定を指定する別の方法は、その設定を Oracle Universal Installer の実行時にコマンドラインの引数として渡す方法です。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -silent "ORACLE_HOME_NAME=OraDBHome1" ...
```

この方法は、パスワードなどの機密情報をレスポンス・ファイルに埋め込まない場合に特に役立ちます。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -silent "s_sysPwdFresh=binks342" ...
```

変数とその設定値は必ず引用符で囲んでください。

関連項目: レスポンス・ファイルの形式の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

サイレントまたは非対話型モードを使用する理由

表 B-1 に、Oracle Universal Installer をサイレントまたは非対話型モードで実行する理由をいくつか示します。

表 B-1 サイレントまたは非対話型モードを使用する理由

モード	使用方法
サイレント	次の場合にサイレント・モードを使用します。 ■ アンアテンド・インストールを実行する場合 ■ ユーザーとの対話なしで複数のシステムに同様のインストールを複数実行する場合 Oracle Universal Installer では、起動に使用したウィンドウに進捗情報が表示されますが、Oracle Universal Installer の画面は表示されません。
非対話型	類似した Oracle ソフトウェアを複数のシステムにインストールし、Oracle Universal Installer プロンプトのすべてではなく一部にのみデフォルトの応答を指定する場合は、非対話型モードを使用します。 特定のインストーラ画面に必要な情報をレスポンス・ファイルに指定しない場合、Oracle Universal Installer でその画面が表示されます。必要な情報をすべて指定した画面は表示されません。

レスポンス・ファイルの一般的な使用手順

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Database Companion CD 製品をインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 必要なインストール設定用にレスポンス・ファイルをカスタマイズするか、または作成します。

レスポンス・ファイルは、次のいずれかの方法で作成できます。

 - 製品に同梱されているサンプル・レスポンス・ファイルを変更する方法
 - 記録モードを使用してコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行する方法

レスポンス・ファイルをカスタマイズまたは作成する方法は、B-4 ページの「[レスポンス・ファイルの準備](#)」を参照してください。
2. このレスポンス・ファイルを指定して、サイレントまたは非対話型モードでコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行します。

注意： Windows Vista では、コマンド・プロンプトで Administrator 権限が必要です。

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行する方法は、B-6 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」を参照してください。

レスポンス・ファイルの準備

この項では、サイレントまたは非対話型モードのインストール時に使用するレスポンス・ファイルの準備に使用できる方法について説明します。

- [レスポンス・ファイル・テンプレートの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの記録](#)

レスポンス・ファイル・テンプレートの編集

Oracle には、製品、インストール・タイプおよび構成ツールごとに、レスポンス・ファイルのテンプレートが用意されています。これらのファイルは、Oracle Database インストール・メディアの `companion¥response` ディレクトリにあります。

レスポンス・ファイル・テンプレートを使用してレスポンス・ファイルを作成する方法は、Enterprise Edition または Standard Edition インストール・タイプの場合に使用すると便利です。

表 B-2 に、使用可能なサンプル・レスポンス・ファイルを示します。

表 B-2 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	このファイルでサイレントに実行するインストール・タイプ
companionCD.db.rsp	「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプ
companionCD.midtier.rsp	Oracle Database Companion CD インストール・タイプ
htmldb.HTMLDBONLY	Oracle HTML DB インストール・タイプの Oracle HTML DB のみのインストール
htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp	Oracle HTML DB インストール・タイプの Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server のインストール

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Database メディアにある `companion¥Response` ディレクトリから、適切なレスポンス・ファイルをハード・ドライブにコピーします。
2. テキスト・ファイル・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

Oracle Database Companion CD 製品のインストール固有の設定を編集するのみでなく、FROM_LOCATION パスが正しく、インストール・メディアの `stage` ディレクトリにある `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この変数は、次に示すような絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="¥¥myserver¥companion¥stage¥products.xml"
```

パスワードなどの機密情報は、レスポンス・ファイル内ではなく、コマンドラインから指定できます。この方法については、B-2 ページの「[レスポンス・ファイルの使用方法](#)」を参照してください。

関連項目： レスポンス・ファイルの作成方法の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。インストール済の Oracle Database で、「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。このマニュアルは HTML 形式で表示されます。

3. B-6 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」の項にある指示に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルの記録

レスポンス・ファイルを作成するには、記録モードを使用して Oracle Universal Installer を対話型モードで実行します。この方法は、カスタム・インストールまたはソフトウェアのみのインストールの場合に使用すると便利です。

レスポンス・ファイルを記録すると「サマリー」ウィンドウを完了した直後にレスポンス・ファイルが生成されるため、Oracle Database Companion CD 製品をインストールしてレスポンス・ファイルを作成する必要がなくなります。この方法でレスポンス・ファイルを作成した後は、必要に応じてその内容をカスタマイズできます。

非対話型モードのインストール中に記録モードを使用する場合、Oracle Universal Installer は、元のソース・レスポンス・ファイルで指定された変数値を新規レスポンス・ファイルに記録します。

注意： 記録モードを使用して、基本インストール・タイプに基づくレスポンス・ファイルを作成することはできません。

レスポンス・ファイルを記録する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルを作成しているコンピュータが、[第2章](#)で説明した要件を満たしていることを確認します。
2. コマンドプロンプトで、cd コマンドを使用して、Oracle Universal Installer の setup.exe 実行可能ファイルが格納されているディレクトリに変更します。

注意： Windows Vista では、コマンド・プロンプトで Administrator 権限が必要です。

setup.exe は、インストール DVD の db ディレクトリにあります。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリに移動します。

3. 次のコマンドを入力します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile response_file_name
```

response_file_name を新規のレスポンス・ファイルの完全なパス名に置き換えます。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile
c:¥response_files¥install_oracle10_2.rsp
```

4. Oracle Universal Installer が起動した後、インストールの設定を入力します。この設定はレスポンス・ファイルに記録されます。
5. 「サマリー」ウィンドウが表示された後、次のいずれかを実行します。
 - 「インストール」をクリックしてレスポンス・ファイルを作成してから、インストールを続行します。
 - レスポンス・ファイルのみを作成し、インストールは続行しない場合は、「取消」をクリックします。インストールは停止しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer によりコマンドラインで指定したパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルが保存されます。

6. 新規レスポンス・ファイルを編集して、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータの環境固有の変更を行います。

Oracle Database Companion CD 製品のインストール固有の設定を編集するのみでなく、FROM_LOCATION パスが正しく、インストール・メディアの stage ディレクトリにある products.xml ファイルを指していることを確認します。この変数は、次に示すような絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="%¥¥myserver¥companion¥response¥stage¥products.xml"
```

パスワードなどの機密情報は、レスポンス・ファイル内ではなく、コマンドラインから指定できます。この方法については、B-2 ページの「[レスポンス・ファイルの使用法](#)」を参照してください。

7. 次の「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」の指示に従い、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行

この段階では、作成したレスポンス・ファイルを指定してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行し、インストールを実行する準備ができています。Windows Vista では、Administrator 権限を使用してコマンド・プロンプトを開く必要があります。Oracle Universal Installer の実行可能ファイル `setup.exe` では、いくつかのオプションが用意されています。これらのオプションについてのヘルプ情報を表示するには、次のように `-help` オプションを指定して `setup.exe` を実行します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -help
```

新規のコマンド・ウィンドウが表示され、「起動を準備中 ...」というメッセージが表示されます。まもなく、このウィンドウにヘルプ情報が表示されます。

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定するには、次のようにします。

1. Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータにレスポンス・ファイルを配置します。
2. コマンド・プロンプトから、適切なレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer を実行します。Windows Vista では、Administrator 権限を使用してコマンド・プロンプトを開く必要があります。

次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup [-silent] "variable=setting" [-nowelcome]
[-noconfig] [-nowait] -responseFile filename
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `filename`: レスポンス・ファイルのフル・パスを指定します。
- `-silent`: サイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「ようこそ」ウィンドウは表示されません。`-silent` を使用する場合、`-nowelcome` オプションは必要ありません。
- `"variable=setting"` は、レスポンス・ファイル内の変数を参照します。この変数は、レスポンス・ファイル内に設定するのではなく、コマンドラインから実行する変数です。変数とその設定値は引用符で囲んでください。
- `-nowelcome`: インストール時に表示される「ようこそ」ウィンドウが表示されません。
- `-noconfig`: インストール時にコンフィギュレーション・アシスタントを実行せず、ソフトウェアのみのインストールを実行します。
- `-nowait`: サイレント・インストールが完了すると、コンソール・ウィンドウが閉じます。

関連項目：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用した削除の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の製品の削除に関する項を参照してください。

非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行

構成パラメータの設定を Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの `wfinstall.bat` スクリプトに直接入力して、非対話型モードで Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行できます。必須の全パラメータ、および使用する機能に対して必須のパラメータを指定する必要があります。

非対話型モードで Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する手順は、次のとおりです。

1. `wfinstall.bat` スクリプトのデフォルトのディレクトリである `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\install` ディレクトリに進みます。
2. テキスト・エディタで `wfinstall.bat` スクリプトを開き、次のような行を検索します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome
oracle_home
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf
/orahome /d1/iasinstall/m21pw1
```

3. スクリプトを編集して、`/wkdir`、`/orahome` および `/ospath` の各パラメータの後に、独自のパラメータを追加します。すべてのパラメータを同じ行に入力してください。それ以外の場合は、スクリプトは正常に実行されません。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome
oracle_home /wfacct workflow_schema /instype installation_type
/tnsconndesc connection_string
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `/wkdir`: Oracle ホーム・ディレクトリ内の Oracle Workflow ディレクトリ。デフォルトのディレクトリは `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf` です。
- `/orahome`: Oracle ホーム・ディレクトリの位置、たとえば、`C:\oracle\product\10.2\Db_1` です。
- `/wintz`: 使用するタイムゾーン、たとえば、"Pacific Daylight Time" です。(タイムゾーンは引用符で囲みます。)
- `/systemroot`: オペレーティング・システムのシステム・ルート・ファイルの位置、たとえば、`C:\WINDOWS` です。
- `/wfacct`: ワークフロー・アカウント。
- `/instype`: 次のいずれかのインストール・オプションを指定します。
 - `server` - Workflow Server のみ構成します。GUI モードおよびコマンドライン・モードの両方で使用可能です。
 - `add_language` - 使用する言語（複数も可）を設定します。GUI モードおよびコマンドライン・モードの両方で使用可能です。
- `/tnsconndesc`: Oracle データベースへの接続文字列です。

注意： パラメータがユーザー・インタフェースおよび非対話型モードの両方で入力できる場合、この項では、非対話型モードのパラメータ名とともに Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント・ウィンドウの対応するフィールド名を示します。

4. /instype パラメータに add_language を指定した場合、追加する言語とともに /nlsopt パラメータを入力します。

追加する言語を引用符で囲みます。たとえば、アラビア語、ドイツ語およびデンマーク語を指定するには、次の値を入力します。

```
"ar d dk"
```

使用可能な言語をすべて使用するには、nlsop を all に設定します。Oracle Workflow Server は、Oracle Database がサポートするすべての言語をサポートします。

関連項目： 標準言語の略語の一覧は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』のロケール・データに関する項を参照してください。

5. /instype パラメータに server を指定した場合、Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして Oracle Internet Directory を統合するには次のパラメータを入力します。

- /ldaphost - LDAP ホスト名
- /ldapport - LDAP 非 SSL ポート
- /ldapuser - LDAP 管理ユーザー名
- /ldaplogbase - 変更ログ DN
- /ldapuserbase - ユーザー・ベース
(たとえば、/ldapuserbase cn=Users,dc=us,dc=oracle,dc=com)

この場合、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントはデータベースで定義された既存の LDAP パラメータを使用して Oracle Internet Directory 統合を構成します。ただし、ここで新しい LDAP パラメータを指定すると、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは設定を更新します。

6. /instype パラメータに server または all を指定した場合、Oracle Workflow 通知メーラーを使用するにはこれらのパラメータを入力します。

- /mailserver - 電子メール・アカウントのインバウンド: サーバー名
- /mailuser - 電子メール・アカウントのインバウンド: ユーザー名
- /mailhost - 電子メール・アカウントのアウトバウンド: サーバー名
- /htmlagent - メッセージ生成: HTML エージェント
- /mailreply - メッセージ生成: 返信先アドレス
- /processfolder - 電子メール処理: 処理フォルダ名
- /discardfolder - 電子メール処理: 廃棄フォルダ名

7. /instype パラメータに server を指定した場合、Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てた表領域を変更するには /tablespace パラメータを有効な既存の表領域名に設定します。

8. Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントによるログ情報の書込み方法を制御するには、次のパラメータを設定します。

- /debug - Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントが workflow.log ファイルにデバッグ情報を書き込む場合は、true を指定します。デフォルトでは、Oracle Workflow でデバッグ情報は記録されません。
- /logdir - Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントが書き込む workflow.log ファイルのあるディレクトリへのパスを指定します。またはログ・ファイルを作成しない場合は、nolog を指定します。デフォルトでは、このログ・ファイルは ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\wf\install ディレクトリに書き込まれます。

9. 変更を保存して wfinstall.bat スクリプトを終了します。

wfinstall.bat スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat
```

wfinstall.bat スクリプトに最小パラメータが含まれる場合（ファイルにすべてを1行で入力）、Oracle Workflow Assistant ウィンドウを表示せずに非対話型モードで構成を実行します。ただし、セキュリティ対策として、サイトが使用するインストール・オプションによってスクリプトは実行時に次のパスワードの入力を求めることがあります。

- Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード
- SYS パスワード
- LDAP ユーザー・アカウントのパスワード（LDAP のパラメータを入力している場合）
- 通知メーラー電子メール・アカウントのパスワード（メーラーのパラメータを入力している場合）

Oracle Database Companion CD グローバル化セッション・サポートの構成

この付録では、次のグローバル化セッション・サポートについて説明します。

- 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用
- NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用

次の機能について説明します。

- [他の言語での Oracle HTML DB のインストール](#)
- [他の言語での Oracle Workflow のインストール](#)
- [異なる言語での Oracle Universal Installer の実行](#)
- [異なる言語での Oracle コンポーネントの使用](#)

他の言語での Oracle HTML DB のインストール

Oracle HTML DB インタフェースはドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、日本語、韓国語、ポルトガル語（ブラジル）、簡体字中国語および繁体字中国語に言語変換されます。Oracle HTML DB の単一インスタンスは 1 つ以上の言語変換されたバージョンでインストールできます。実行時に、各ユーザーの Web ブラウザ言語設定により特定の言語バージョンが決定されます。

言語変換された Oracle HTML DB は特定の言語をサポートするキャラクタ・セットを含むデータベースにロードされます。言語変換された Oracle HTML DB を言語の文字コードをサポートするデータベースにインストールすると、インストールは失敗するか、言語変換された Oracle HTML DB インスタンスが実行時に破損している可能性があります。データベースのキャラクタ・セット AL32UTF8 は、すべての言語変換された Oracle HTML DB をサポートします。

SQL*Plus を使用して言語変換された Oracle HTML DB を手動でインストールできます。インストール・ファイルは UTF8 でエンコードされています。

注意：ターゲット・データベースのキャラクタ・セットに関係なく、言語変換された Oracle HTML DB をインストールするには、SQL*Plus を起動する前に NLS_LANG 環境変数のキャラクタ・セットの値を AL32UTF8 に設定する必要があります。

注意：AL32UTF8 は、XMLType データに適した Oracle Database キャラクタ・セットです。これは、IANA に登録されている標準 UTF-8 エンコーディングと同等です。UTF-8 エンコーディングでは、有効なすべての XML キャラクタがサポートされます。

Oracle Database のデータベース・キャラクタ・セット UTF8（ハイフンなし）と、データベース・キャラクタ・セット AL32UTF8 または文字コード UTF-8 を混同しないでください。データベース・キャラクタ・セット UTF8 は、AL32UTF8 で置き換えられています。XML データに UTF8 を使用しないでください。UTF8 でサポートされるのは Unicode バージョン 3.1 以前のみであり、有効な XML キャラクタがすべてサポートされているわけではありません。AL32UTF8 にはこのような制限はありません。

XML データにデータベース・キャラクタ・セット UTF8 を使用すると、致命的なエラーが発生したり、セキュリティに悪影響を与える可能性があります。データベース・キャラクタ・セットでサポートされていない文字が入力ドキュメントの要素名に表示される場合、その文字は、置換文字（通常は「?」）で置換されます。この結果、解析が終了し、例外が発生します。

次の例では、Oracle HTML DB 変換をロードするための有効な NLS_LANG 設定を示します。

```
American_America.AL32UTF8
Japanese_Japan.AL32UTF8
```

言語変換された Oracle HTML DB をインストールするには、次のようにします。

1. 環境変数 NLS_LANG を設定します。キャラクタ・セットは必ず AL32UTF8 に設定してください。次に例を示します。

```
c:¥> set NLS_LANG=American_America.AL32UTF8
```

2. SQL*Plus を起動し、ターゲット・データベースに SYS で接続します。

```
c:¥> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
```

3. 次の文を実行します。

```
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = FLOWS_010600;
```

4. 適切な言語固有スクリプトを実行します。次に例を示します。

```
SQL> @c:¥oracle¥product¥10.2.0¥db_1¥htmldb¥builder¥de¥load_de.sql
```

インストール・スクリプトは、解凍されたディストリビューション /htmldb/builder 内の言語コードで識別されるサブディレクトリに格納されています。たとえば、ドイツ語のスクリプトは /htmldb/builder/de に格納され、日本語のスクリプトは /htmldb/builder/ja に格納されています。それぞれのディレクトリには、言語コードで示された言語ロード・スクリプト（たとえば、load_de.sql または load_ja.sql）があります。

関連項目： リモートの Oracle データベースにある既存の Oracle HTML DB に言語を追加する必要がある場合は、4-12 ページの「[リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

他の言語での Oracle Workflow のインストール

Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの「[言語の追加](#)」オプションを使用して、Oracle Workflow を他の言語でインストールします。

関連項目： Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの起動方法は、3-11 ページの「[Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備](#)」を参照してください。

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

Oracle Universal Installer は、デフォルトでオペレーティング・システムの選択言語で実行されます。次のその他の言語で Oracle Universal Installer を実行することができます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 日本語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行するには、次のようにします。

1. オペレーティング・システムの実行に使用している言語を変更します。たとえば、Windows 2000 の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「地域のオプション」を選択します。
 - b. ドロップダウン・リストで前述の一覧から言語を選択し、「OK」を選択します。
2. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択した言語は、NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられます。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタント、Database コンフィギュレーション・アシスタントなど）の使用に他の言語を選択できます。この指定では、Oracle Universal Installer が実行される言語は変更されないことに注意してください。選択した言語で Oracle コンポーネントを実行するには、その言語がオペレーティング・システムの言語設定と同じであることが必要です。オペレーティング・システムの言語は、「コントロールパネル」の「地域のオプション」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
 - インストール・メディアから起動する場合：インストール・メディアから companion ディレクトリに移動し、setup.exe をダブルクリックします。
 - インストールされた Oracle Database Companion CD から起動する場合：「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「製品の言語」ボタンを選択します。「言語の選択」ウィンドウが表示されます。
3. 「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントの使用時に使用する言語を選択します。
4. > 矢印を使用して「選択された言語」フィールドに言語を移動し、「OK」をクリックします。
5. インストールする適切な製品を選択し、「次へ」をクリックします。

インストールが完了すると、インストールしたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが選択した言語で表示されます。

NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、各自が選択したロケールおよびキャラクタ・セット設定でデータベースと対話できます。NLS_LANG パラメータは、Oracle ソフトウェアのロケール動作を指定します。このパラメータによって、クライアント・アプリケーションとデータベースで使用する言語と地域が設定されます。また、SQL*Plus などのクライアント・プログラムでのデータの入力と表示に使用されるキャラクタ・セットも設定されます。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOMEID\NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。このパラメータの形式は、次のとおりです。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

各項目の意味は次のとおりです。

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を示すための規則を指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算するための規則を指定します。
CHARACTER_SET	データベース・クライアントのエンコーディングを指定します。これは、クライアント・プログラムでデータの入力または表示に使用されるキャラクタ・セットです。

次の表に、NLS_LANG パラメータ値の一部を示します。

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
フランス語（フランス）	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P15
	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P1
	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
	FRENCH_FRANCE.AL32UTF8
日本語（日本）	JAPANESE_JAPAN.JA16EUC
	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
	JAPANESE_JAPAN.AL32UTF8

関連項目：

- Oracle Database の Windows インストールにおける NLS_LANG の動作については、『Oracle Database インストレーション・ガイド』を参照してください。
- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータとグローバリゼーション・サポート初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。
- オペレーティング・システムのロケール環境設定を判別する方法は、該当するオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

Oracle Companion CD のポート番号の管理

この付録では、デフォルトのポート番号を示し、割り当てられたポートをインストール終了後に変更する方法について説明します。

- [ポートの管理](#)
- [ポート番号とアクセス URL の表示](#)
- [Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル](#)
- [Oracle HTTP Server ポートの変更](#)
- [Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更](#)
- [Oracle Ultra Search ポートの変更](#)

ポートの管理

インストール時に、**Oracle Universal Installer** によって、各コンポーネントに対して、デフォルトのポート番号のセットからポート番号が割り当てられます。多数の **Oracle Database** コンポーネントおよびサービスでポートが使用されます。管理者は、これらのサービスで利用されるポート番号を把握し、同じポート番号がホスト上の 2 つのサービスで使用されていないことを確認する必要があります。

ほとんどのポート番号がインストール時に割り当てられます。すべてのコンポーネントおよびサービスに割当て済みのポート範囲があり、これは、**Oracle Database** によってポートの割当て時に使用されるポート番号のセットです。範囲内の最小番号から順に、次のチェックが実行されます。

- そのポートが、ホスト上の別の **Oracle Database** インストールで利用されているかどうか
インストールがその時点で稼働中または停止されている場合も、**Oracle Database** ではポートが利用されているかどうかを検出できます。
- そのポートが、現在実行中のプロセスで利用されているかどうか
これには、**Oracle Database** 以外のプロセスであっても、ホスト上のすべてのプロセスが含まれます。

前述の設問に 1 つでも該当する場合、**Oracle Database** は、割当済ポート範囲内で次に上位のポートに移動し、空きポートが見つかるまでチェックを続行します。

ポート番号とアクセス URL の表示

ほとんどの場合、**Oracle Database** コンポーネントのポート番号は、ポートの構成に使用するツールにリストされます。また、一部の **Oracle Database** アプリケーションのポートは、`portlist.ini` ファイルにリストされています。このファイルは、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥install` にあります。

ポート番号を変更しても、`portlist.ini` ファイル内では更新されないため、このファイルに依存できるのはインストール直後のみです。ポート番号を検索または変更するには、この付録で説明する方法を使用します。

Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル

次の表に、インストール時に構成されるコンポーネントに対して使用されるポート番号とプロトコルを示します。デフォルトでは、範囲内の最初のポートが使用可能な場合は、そのポートがコンポーネントに割り当てられます。

表 D-1 Oracle コンポーネントで使用されるポート

コンポーネントおよび説明	デフォルトのポート番号	ポート範囲	プロトコル
Oracle HTTP Server Oracle HTML DB などの Oracle アプリケーションは、このポートを介して Web サーバーと通信できます。これはインストール時に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle HTTP Server ポートの変更 」を参照してください。	7777	7777 ~ 7877	HTTP
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ Oracle Workflow 用の HTTP ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6010	6010 ~ 6020	TCP/HTTP
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ Oracle Workflow 用の JMS ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6030	6030 ~ 6040	TCP
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ Oracle Workflow 用の RMI ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6110	6050 ~ 6060	TCP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の HTTP ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6070	6070 ~ 6080	TCP/HTTP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の JMS ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6090	6090 ~ 6100	TCP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の RMI ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6110	6110 ~ 6120	TCP

表 D-1 Oracle コンポーネントで使用されるポート（続き）

コンポーネントおよび説明	デフォルトのポート番号	ポート範囲	プロトコル
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の HTTP ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5620	5620 ~ 5639	TCP/HTTP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の RMI ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5640	5640 ~ 5659	TCP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の JMS ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5660	5660 ~ 5679	TCP

Oracle HTTP Server ポートの変更

Oracle HTTP Server ポートを変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle HTTP Server ホームで、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf\httpd.conf` ファイル内の次の設定を変更します。

```
Port port
Listen listener
```

2. Oracle HTTP Server を再起動します。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目： 5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」

Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更

次の各項では、Oracle Workflow コンポーネント・コンテナおよび管理コンテナの HTTP、RMI および JMS ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、次のファイルを編集します。

- Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの場合：
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Component_Container\config\http-web-site.xml`
 web-site 要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="6001" ...>
```
- Oracle Workflow 管理コンテナの場合：
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Management_Container\config\http-web-site.xml`
 web-site 要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="6061" ...>
```

RMI ポートの変更

Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの RMI ポートを変更するには、
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Component_Container\config\rmi.xml` ファイル内の `rmi-server` 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="6041">
```

Oracle Workflow 管理コンテナの場合は、
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Management_Container\config\rmi.xml` ファイル内の `rmi-server` 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="6101">
```

JMS ポートの変更

Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの JMS ポートを変更するには、
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Management_Container\config\jms.xml` ファイル内の `jms-server` 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="6021">
```

Oracle Workflow 管理コンテナの場合は、
`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_Workflow_Management_Container\config\jms.xml` ファイル内の `jms-server` 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="6080">
```

Oracle Ultra Search ポートの変更

次の各項では、Oracle Ultra Search ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\http-web-site.xml` ファイル内の `web-site` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<web-site port="5620"...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\rmi.xml` ファイル内の `rmi-server` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<rmi-server port="5640"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\jms.xml` ファイル内の `jms-server` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<jms-server port="5660"...>
```

Oracle Database Companion CD のインストール に関するトラブルシューティング

この付録では、次のトラブルシューティングについて説明します。

- 要件の確認
- インストール・セッションのログの確認
- インストール失敗後のクリーン・アップ
- サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理
- Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合
- Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティングの手順を実行する前に、次を実行してください。

- 第2章「Oracle Database Companion CD の要件」をチェックし、システムが要件を満たしていることと、インストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。
- 製品をインストールする前に、該当するプラットフォーム用の製品に関するリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。最新版のリリース・ノートは、次の Oracle Technology Network の Web サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/index.html>

インストール・セッションのログの確認

この項の内容は、次のとおりです。

- Oracle Companion CD インストール・セッションのログの確認
- Oracle HTML DB インストール・セッションのログの確認

Oracle Companion CD インストール・セッションのログの確認

Oracle Universal Installer を最初に実行すると、システムにインストールされる製品のインベントリと他のインストール情報を記録するために、`DRIVE_LETTER:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Inventory¥logs` ディレクトリが作成されます。

ログ・ファイルの名前は `installActionsdate_time.log` で、`date_time` はインストールの日付と時刻です。たとえば `installActions2004-055-14_09-00-56-am.log` などです。

インストール済コンポーネントのリストは、Oracle Universal Installer のウィンドウで「インストールされた製品」をクリックしても確認できます。

注意：Inventory ディレクトリとその内容は、削除したり手動で変更したりしないでください。システムにインストールされた製品を Oracle Universal Installer で特定できなくなります。

`installActionsdate_time.log` ファイルには、インストール・プロセス中に実行されたアクションのログが記録されます。インストール中にリンク・エラーがあれば、それもこのファイルに記録されます。
`installActionsdate_time.log` ファイルは削除または変更しないでください。

Oracle HTML DB インストール・セッションのログの確認

Oracle HTML DB をインストールすると、Oracle Universal Installer は、ネーミング規則 `installYYYY-MM-DD_HH24-MI-SS.log` を使用して `htmldb` ディレクトリにログ・ファイルを作成します。インストールが正常な場合は、次のテキストがログ・ファイルに書き込まれます。

Thank you for installing Oracle HTML DB.
Oracle HTML DB is installed in the FLOWS_010600 schema.

ログ・ファイルにエラーがある場合でも、インストールに失敗したわけではありません。許容されるエラーは、ログ・ファイルにそのように記録されます。

インストール失敗後のクリーン・アップ

5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動](#)」に従って Oracle HTTP Server を停止します。

次の各項に進んで処理を実行します。

- [Oracle Companion CD インストール失敗後のクリーン・アップ](#)
- [Oracle HTML DB インストール失敗後のクリーン・アップ](#)

Oracle Companion CD インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールに失敗した場合は、インストール中に Oracle Universal Installer によって作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。ファイルを削除するには、次のようにします。

1. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、companion ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリに移動します。setup.exe をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「ようこそ」ウィンドウの「製品の削除」をクリックするか、Oracle Universal Installer のいずれかのウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。「インベントリ」ウィンドウが表示され、インストールされている製品の一覧が表示されます。
3. 削除する製品を選択して「削除」をクリックします。

注意： システムに複数のインストール環境がある場合、他の Oracle ホームにインストールされている製品も「インベントリ」画面に表示されます。他の Oracle ホームから製品を選択すると、それらの製品も削除されます。

4. Oracle HTTP Server をインストールした場合は、失敗したインストールで使った Oracle HTTP Server の Oracle ホーム・ディレクトリを手動で削除します。
5. Oracle HTML DB をインストールした場合は、次の項の手順に従います。

Oracle HTML DB インストール失敗後のクリーン・アップ

Oracle HTML DB の正常なインストールでは、次のバナーがインストールの終了時に表示されます。

```
Thank you for installing Oracle HTML DB.  
Oracle HTML DB is installed in the FLOWS_010600 schema.
```

ただし、インストールに失敗すると、Oracle Universal Installer で Oracle HTML DB コンポーネントを削除する以外に、インストール・タイプによって 1 つまたは 2 つのデータベース・スキーマを再インストールする前に削除する必要があります。

関連項目： E-3 ページの「[Oracle Companion CD インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」

アップグレード失敗後のクリーン・アップ

アップグレードに失敗した場合は、最初に Oracle HTML DB をリリース 1.5 に戻し、リリース 1.6 に関連したスキーマを削除します。

Oracle HTML DB をリリース 1.5 に戻すには、次のようにします。

1. images ディレクトリを変更した場合、リリース 1.5 の images ディレクトリにテキスト別名 /i/ を指定しなおす必要があります。
2. SQL*Plus で次のコマンドを実行します。
 - a. SQL*Plus を起動して Oracle HTML DB が SYS または SYSTEM としてインストールされているデータベースに接続します。次に例を示します。

```
c:¥> sqlplus sys/SYS_password as sysdba
```
 - b. 次のように実行します。

```
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = FLOWS_010600;
SQL> exec FLOWS_010600.wv_flow_upgrade.switch_schemas
('FLOWS_010600','FLOWS_010600');
```

リリース 1.6 のスキーマを削除するには、次のようにします。

1. SQL*Plus を起動して Oracle HTML DB が SYS または SYSTEM としてインストールされているデータベースに接続します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
DROP user FLOWS_010600 CASCADE;
```

新しいインストール失敗後のクリーン・アップ

新しいインストール失敗後にスキーマを削除するには、次のようにします。

1. SQL*Plus を起動して Oracle HTML DB が SYS または SYSTEM としてインストールされているデータベースに接続します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
drop user FLOWS_010600 cascade;
drop user FLOWS_FILES cascade;
```

サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

サイレントまたは非対話型インストールが正常に実行されたかどうかを判断するには、`DRIVE_LETTER:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` ディレクトリにある `silentInstallActionsdate_time.log` ファイルを調べます。

サイレント・インストールは、次の場合に失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定していない場合
- 不正または不完全なレスポンス・ファイルを指定している場合
 たとえば、製品固有のデータは正しく指定しているが、ステージング領域の位置の指定が誤っていることがよくあります。このような場合は、`FROM_LOCATION` 変数をチェックし、インストール・メディアにある `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この `products.xml` は、インストール・メディアの `companion¥stage` にあります。
- Oracle Universal Installer にディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer またはコンフィギュレーション・アシスタントは、実行時にレスポンス・ファイルの妥当性を検査します。妥当性検査に失敗すると、インストールまたは構成プロセスは終了します。コンテキスト、形式または型が不正な場合、そのパラメータ値は、ファイルに指定されていないとみなされます。

関連項目：対話型インストールのログ・ファイルの詳細は、E-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合

Oracle HTML DB のイメージが正しく表示されない場合は、イメージが格納されているディレクトリの位置指定に問題がある可能性があります。イメージ用ディレクトリの位置は、`marvel.conf` ファイルに別名で格納されます。この問題を処理する方法は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタで、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥conf` にある `marvel.conf` ファイルを開きます。
2. 次のような `images` ディレクトリへの別名を検索します。
`Alias /i/ C:/oracle/product/10.2.0/db_HTMLDB/htmldb/images`
3. 次の問題についてチェックします。
 - 別名 `/i/` が複数存在する場合は、`/i/` の最初のインスタンスを他の別名に変更します。または、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥htmldb¥images` ディレクトリから、最初の別名 `/i/` で定義されたディレクトリにイメージをコピーします。
 - 別名 `/i/` が正しいディレクトリを指していない場合は、ディレクトリ・パスを修正します。

Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合

ユーザーが仮想ホストを介して Oracle HTML DB にアクセスしている場合、オンライン・ヘルプは動作しません。次の例について考えてみます。

- Oracle HTML DB の DAD が格納されている Oracle HTTP Server のホスト名が `internal.server.com` で、ポートが 7777 であるとしします。
- ユーザーは仮想ホストを介して Oracle HTML DB にアクセスします。この場合、ユーザーの Web ブラウザには、`external.server.com` とポート 80 が表示されます。

この例では、ユーザーが `internal.server.com` にアクセスできない場合、Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプは動作しません。この問題を解決するには、Oracle HTML DB のデータベース・アクセス記述子 (DAD) に次の行を追加して、CGI 環境変数の `SERVER_NAME` および `SERVER_PORT` を上書きします。

```
PlsqlCGIEnvironmentList SERVER_NAME=external.server.com
PlsqlCGIEnvironmentList SERVER_PORT=80
```

関連項目：CGI 環境変数の上書きについては、『Oracle Application Server `mod_plsql` ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

索引

A

Administrators グループ

Oracle Database Products のインストール要件, 3-10
既存の HTTP Server ホームへの Oracle HTML DB インストールの要件, 3-6

新規ホームへの Oracle Database Companion Product のインストール要件, 3-15

AL32UTF8 キャラクタ・セット

アップグレードの考慮事項, C-2

Apache HTTP Server, 1-3

apachectl スクリプト, 4-10

C

CGI 環境変数, E-5

companionCD.db.rsp レスポンス・ファイル, B-4

companionCD.midtier.rsp レスポンス・ファイル, B-4

Configuration Assistant

サイレントまたは非対話型インストール時の非使用, B-6

D

dadTool.pl ユーティリティ, 4-12

DHCP コンピュータ, インストール, 2-12

DVD

ドライブ, インストール, 3-3

ハード・ドライブへのコピー, 3-3

H

hosts ファイル

場所, 2-12

マルチホーム・コンピュータ用の編集, 2-12

HTML DB, 「Oracle HTML DB」を参照

htmldbca ユーティリティ, 4-12

htmldb.HTMLDBONLY.rsp レスポンス・ファイル, B-4

htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp レスポンス・ファイル, B-4

HTTP Server, 「Oracle HTTP Server」を参照

httpd.conf ファイル, 移行, 4-3

I

interMedia Image Accelerator

インストール, 3-9

IP アドレス, 複数, 2-12

J

JAccelerator, 1-7

JAccelerator (NCOMP)
インストール, 3-9

Java Access Bridge

JRE 1.4.2, A-2

インストール, A-2

概要, A-2

構成, A-3

JPublisher

Oracle SQLJ Runtime, 1-7

Oracle SQLJ Translator, 1-7

インストール, 3-9

概要, 1-7

JRE 1.4.2, Java Access Bridge の設定, A-2

L

Legato Single Server Version (LSSV), 1-4

LoadModule ディレクティブ, 4-4

M

mod_plsql, データベース・アクセス記述子の移行, 4-9

N

NCOMP, 「ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ」を参照

Net コンフィギュレーション・アシスタント (NetCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の非使用, B-6

NLS_LANG パラメータ

概要, C-5

O

OC4J_Workflow_Component_Container, 5-5

OC4J_Workflow_Management_Container, 5-5

OPMN, 「Oracle Process Manager and Notification サーバー」を参照

Oracle Application Server の OC4J コンテナ

OC4J_Workflow_Component_Container, 5-5

OC4J_Workflow_Management_Container, 5-5

Oracle Database

Oracle HTML DB の削除, 3-18

以前のリリースの HTTP Server へのアクセス, 4-9

- Oracle Database 10g Companion Products, 1-8
 - インストールされる製品, 1-8
 - 概要, 1-8
 - 削除, 3-19
 - 新規 Oracle ホームへのインストール, 3-15
 - 要件, 2-6
- Oracle Database 10g Products
 - JPublisher, 1-7
 - Oracle Database Examples, 1-5
 - Oracle Text
 - 提供されるナレッジ・ベース, 1-5
 - Oracle Ultra Search, 1-6
 - Oracle ホーム・ディレクトリ, 指定, 3-9
 - Oracle ホームの位置, 3-9
 - インストール, 3-9
 - インストールされる製品, 1-4
 - インストール・タイプのコンポーネント, 1-4
 - インストールの位置, 3-9
 - 概要, 1-4
 - 削除, 3-19
 - ディスク領域要件, 2-5
 - データベース要件, 2-6
 - ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ, 1-7
 - 要件, 2-5
- Oracle Database Companion 10g Products
 - Oracle ホームの位置, 3-15
 - インストールの位置, 3-15
- Oracle Database Companion CD
 - インストールの概要, 1-1
 - ソフトウェアのインストール, 3-1
 - ソフトウェア要件, 2-11
 - トラブルシューティング, E-1
 - ハードウェア要件, 2-11
- Oracle Database Examples
 - インストール, 3-9
 - 概要, 1-5
 - サンプル・スキーマ, 1-5
 - 必須製品, 1-5
- Oracle Database Recovery Manager (RMAN)
 - 概要, 1-4
- Oracle Enterprise Manager
 - Oracle Workflow Manager コンポーネント, 5-5
- Oracle Enterprise Manager Database Control
 - Oracle Workflow Manager へのログイン, 5-5
- Oracle HTML DB
 - HTML DB イメージ・ディレクトリの別名, E-5
 - htmldbca ユーティリティ, 4-12
 - Oracle HTTP Server, 1-3
 - Oracle HTTP Server 要件, 2-4
 - Oracle Text の要件, 2-4
 - Oracle データベースからの削除, 3-18
 - Oracle ホームの位置, 3-6
 - Web ブラウザ要件, 2-3
 - XML DB 要件, 2-4
 - インストール概要, 1-8
 - インストール後の作業, 4-10
 - インストール失敗後のクリーン・アップ, E-3
 - インストールの位置, 3-6
 - インストール前の作業, 3-5
 - オンライン・ヘルプが動作しない場合, E-5
 - 概要, 1-3
 - 管理設定作業, 5-4
- 既存の Oracle HTTP Server ホームへのインストール, 3-5
- 削除, 3-19
- 新規 Oracle ホームへのインストール, 3-15
- 他の言語でインストール, C-2
- ディスク領域要件, 2-3
- データベース要件, 2-3
- パッチのダウンロード, 4-2
- ポート, 「Oracle HTTP Server ポート」を参照
- 要件, 2-2, 2-2 ~ 2-5
- リモート・データベースでのインストールおよび構成, 4-12
- リモート・データベースでの既存の Oracle HTML DB のアップグレード, 4-12
- リモート・データベースでの既存の Oracle HTML DB への言語の追加, 4-12
- ログイン, 5-3
- Oracle HTML DB イメージの不正確な表示, E-5
- Oracle HTML DB のパスワードの不明瞭化, 4-12
- Oracle HTML DB のみインストール・タイプ
 - インストールされる製品, 1-3
- Oracle HTTP Server
 - httpd.conf ファイル内のポート番号の変更, 4-5
 - LoadModule ディレクティブ, 4-4
 - Oracle Process Manager and Notification サーバー, 4-10
 - Oracle ホームの位置, 3-6
 - 以前のリリースからの移行, 4-3
 - インストール概要, 1-8
 - インストール後の作業, 4-3 ~ 4-10
 - インストール先, 3-6, 3-15
 - インストールの位置, 3-6
 - 概要, 1-3
 - 起動, 5-2
 - サーバー証明書と秘密鍵の移行, 4-7
 - 削除, 3-19
 - サポートされない機能に関する構成情報の削除, 4-5
 - 使用される Apache HTTP Server バージョン, 1-3
 - 新規 Oracle ホームでの要件, 3-6, 3-15
 - 新規 Oracle ホームへのインストール, 3-15
 - シングル・サインオンの有効化, 1-3
 - 停止, 5-2
 - ディスク領域要件, 2-10
 - パッチのダウンロード, 4-2
 - 必要なバージョン, 2-4
 - ファイルのバックアップ, 4-3
 - ポート
 - 範囲とプロトコル, D-3
 - 変更, D-4
 - リリース 9.0.3
 - 構成 (アップグレード), 4-11
- Oracle HTTP Server の起動, 5-2
- Oracle HTTP Server の停止, 5-2
- Oracle interMedia Image Accelerator, 1-7
- Oracle Internet Directory
 - Oracle Workflow ディレクトリ・サービスの同期化, 3-13
 - Oracle Workflow との統合, 3-12
- Oracle JDBC Development Drivers
 - インストール, 3-9
 - 概要, 1-4
- Oracle JVM, 1-7

- Oracle *MetaLink* Web サイト
 - パッチ, 4-2
 - 要件の情報, 2-11
- Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN), 4-10
- Oracle SQLJ
 - インストール, 3-9
 - 概要, 1-5
- Oracle SQLJ Runtime, 1-7
- Oracle SQLJ Translator, 1-7
- Oracle Text
 - Oracle HTML DB の要件, 2-4
 - 提供されるナレッジ・ベース
 - 概要, 1-5
 - デフォルト言語スクリプト, 2-4
- Oracle Text のナレッジ・ベース
 - インストール, 3-9
- Oracle Ultra Search
 - 概要, 1-6
 - スタート・ガイド, 5-6
 - デフォルトのスキーマ, 5-6
 - ポート
 - 範囲とプロトコル, D-4
 - 変更, D-5
- Oracle Universal Installer, 3-1
 - インベントリ, E-2
 - 異なる言語でのコンポーネントの実行, C-4
 - 異なる言語での実行, C-3
 - 実行可能ファイルの場所, B-6
 - 使用するバージョン, 3-2
 - ソフトウェアの削除, 3-18
 - ログ・ファイル, E-2
- Oracle Universal Installer (OUI)
 - コマンドラインから実行, B-6
- Oracle Workflow
 - HTML のヘルプの構成, 4-16
 - OC4J_Workflow_Component_Container, 5-5
 - OC4J_Workflow_Management_Container, 5-5
 - Oracle Internet Directory との統合, 3-12
 - Oracle Workflow Client, 1-6
 - Oracle Workflow Manager へのログイン, 5-5
 - Server のインストールの確認, 2-9
 - 「Oracle Workflow Client」、「Oracle Workflow Manager」、「Oracle Workflow 中間層コンポーネント」、「Oracle Workflow Server」、「Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント」も参照
 - インストール後の作業, 4-15 ~ 4-17
 - Oracle Workflow HTML のヘルプの構成, 4-16
 - その他の設定作業, 4-17
 - 無効なオブジェクトのコンパイル, 4-16
 - 要件の確認, 4-16
 - インストールのその他の選択肢, 1-6
 - 管理設定作業, 5-6
 - 削除, 3-18, 3-19
 - スタート・ガイド, 5-4
 - ディスク領域要件, 2-8
 - ディレクトリ・サービス, 3-13
 - パッチのダウンロード, 4-2
 - 表領域, 変更, 3-14
 - ポート
 - 範囲とプロトコル, D-3
 - 変更, D-4

- ホームページへログイン, 5-4
- 無効なオブジェクトのコンパイル, 4-16
- Oracle Workflow Client, 1-6
- Oracle Workflow Manager
 - Oracle Enterprise Manager, 5-5
 - ログイン, 5-5
- Oracle Workflow Server
 - 「Oracle Workflow」も参照
 - インストール, 3-9
 - 概要, 1-6
 - 構成, 3-11
 - 要件, 2-6
- Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント
 - GUI モードでの実行, 3-11
 - 非対話型モードでの実行, B-7
- Oracle Workflow 中間層コンポーネント
 - 「Oracle Workflow」も参照
 - インストール, 3-15
 - 概要, 1-8
 - 要件, 2-9
- ORACLE_HOME 環境変数
 - Companion CD インストールのための削除, 3-6
 - Oracle Products インストールのための削除, 3-10
 - 以前の HTTP Server の移行, 4-9
- ORACLE_HOSTNAME 環境変数
 - インストール前に設定, 2-13
 - 概要, 2-12
 - 複数の別名を持つコンピュータ, 2-13
 - 複数のホームがあるコンピュータ, 2-12
- Oracle インベントリ・ログ・ファイル, E-2
- Oracle ホーム・ディレクトリ
 - 指定, 3-9
 - マルチホーム, 2-12
- Oracle ホスト名, インストール前に設定, 2-13

P

- PATH 環境変数, 4-9
- PERL5LIB 環境変数, 4-6
- portlist.ini ファイル, D-2

R

- readme.txt ファイル, D-2

S

- Secure Sockets Layer (SSL) 設定, 4-8
- SERVER_NAME CGI 環境変数, E-5
- SERVER_PORT CGI 環境変数, E-5
- setup.exe, 「Oracle Universal Installer (OUI)」を参照
- SSLCipherSuite 設定, 4-8

T

- Telnet サービスのサポート, 2-11

W

- Web ブラウザ要件
 - Oracle HTML DB, 2-3
- Windows Telnet サービスのサポート, 2-11

Windows Terminal Server

サポートされないコンポーネント, 2-11

Windows ターミナルサービスのクライアント, 2-11

WK_TEST 管理ユーザー名, 5-6

WKPROXY 管理ユーザー名, 5-6

WKSYS 管理ユーザー名, 5-6

X

XML DB 要件, Oracle HTML DB, 2-4

あ

アカウント

WK_TEST, 5-6

WKPROXY, 5-6

WKSYS, 5-6

アクセシビリティ・ソフトウェア, Java Access Bridge,
A-1

アダプタ, ループバック, 「ループバック・アダプタ」、
「ネットワーク・アダプタ」を参照

アップグレード

AL32UTF8 キャラクタ・セット, C-2

Oracle HTTP Server 9.0.3 の構成, 4-11

wdbsvr.app の変更, 4-11

パスワードの不明瞭化, 4-12

アップグレード, 「パッチ」を参照

い

移行

httpd.conf ファイル, 4-3

以前の Oracle HTTP Server から, 4-3

イメージ, Oracle HTML DB, E-5

インストール

DVD ドライブ, 3-3

Java Access Bridge, A-2

Oracle Database 10g Products, 3-9

一般的な手順, 3-2

概要, 3-2

画面の非表示, B-6

既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle HTML
DB のインストール, 3-5

コンピュータの別名, 複数, 2-13

サイレント・モードでのエラー処理, E-4

失敗

Companion CD, E-3

Oracle HTML DB, E-3

新規 Oracle ホームへの Oracle Database 10g

Companion Products のインストール, 3-15

ソフトウェア, 3-1

バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC),
3-10

非対話型モードでのエラー処理, E-4

複数, 3-2

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC), 3-10

リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモ
ート・インストール, 3-4

リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-3

レスポンス・ファイル, E-4

ログ・ファイル (非対話型インストール), E-4

インストール後の作業

Oracle HTML DB, 4-10

Oracle HTTP Server, 4-3, 4-10

Oracle Workflow, 4-15, 4-17

インストール・タイプ

Oracle Database 10g Companion Products, 1-8

Oracle Database 10g Products, 1-4

Oracle HTML DB, 1-3

インベントリ・ディレクトリ, E-2

え

エラー

サイレント・モード, E-4

非対話型インストール, E-4

か

環境変数

CGI, 上書き, E-5

ORACLE_HOME

Companion CD インストールのための削除, 3-6

Oracle Products インストールのための削除, 3-10

以前の HTTP Server の移行, 4-9

ORACLE_HOSTNAME, 2-12

PATH, 4-9

PERL5LIB, 4-6

SERVER_NAME (CGI), E-5

SERVER_PORT (CGI), E-5

き

既存の Oracle ホーム

Oracle Workflow 要件, 2-9

基本インストール方法

サイレントまたは非対話型インストール, B-5

記録モード, B-5

け

言語

異なる言語での Oracle コンポーネントのインス
トール, C-3

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, C-4

他の言語での Oracle HTML DB のインストール, C-2

他の言語での Oracle Workflow のインストール, C-3

リモート・データベースでの追加の Oracle HTML
DB への追加, 4-12

こ

コンポーネント

異なる言語での使用, C-4

さ

サイレント・モード

エラー処理, E-4

概要, B-2

使用する理由, B-3

「非対話型モード」、「レスポンス・ファイル」も参照,
B-2

削除

Oracle Database からの Oracle HTML DB の削除,
3-18

Oracle ソフトウェア, 3-18
ソフトウェア, 3-18
レスポンス・ファイル, 使用, B-6
サポートされないコンポーネント
Windows Terminal Server, 2-11
サンプル・スキーマ, 1-5

し

自動ストレージ管理 (ASM)
サイレントまたは非対話型モードのインストール,
B-3
新規 Oracle ホーム, 3-15
HTTP Server のインストール, 3-15
Oracle HTML DB のインストール, 3-15
新規 Oracle ホーム, Oracle HTTP Server の要件, 3-6,
3-15
新規インストール
パスワードの不明瞭化, 4-12

せ

セキュリティ
「パスワード」も参照

た

ターミナル サービスのクライアント, 2-11
ターミナル サービスのサポート, 2-11
他の言語での Oracle Workflow のインストール, C-3

て

ディスク領域要件
Oracle Database 10g Products, 2-5
Oracle HTML DB, 2-3
Oracle HTTP Server, 2-10
データベース
Oracle Backup および Recovery でのリカバリ, 1-4
データベース・アクセス記述子
internal.server.com へのアクセス, E-5
Oracle HTML DB インストール時に作成, 3-8
移行, 4-9
データベース・コンフィギュレーション・アシスタント
(DBCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の非使用,
B-6
データベースのバックアップ
Oracle Database Recovery Manager, 1-4
データベースのリカバリ
Oracle Backup および Recovery, 1-4
データベース要件
Oracle Database 10g Products, 2-6
Oracle HTML DB, 2-3

と

ドキュメント
インストール, 3-9
トラブルシューティング, E-1
Companion CD インストール失敗後のクリーン・
アップ, E-3
HTML DB イメージの不正確な表示, E-5

Oracle HTML DB イメージ, E-5
Oracle HTML DB インストール失敗後のクリーン・
アップ, E-3
インベントリ・ログ・ファイル, E-2
ログ・ファイル
Companion CD, E-2
Oracle HTML DB, E-2

ね

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
インストール, 3-9
概要, 1-7
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP),
1-7
ネットワーク・アダプタ
「ループバック・アダプタ」、「プライマリ・ネット
ワーク・アダプタ」を参照
複数の別名を持つコンピュータ, 2-13
プライマリ, 複数の別名を持つコンピュータ, 2-13
プライマリ・アダプタの確認方法, 2-13
ネットワーク・カード, 複数, 2-12
ネットワークに関するトピック, 2-12
DHCP コンピュータ, 2-12
概要, 2-12
ハード・ドライブからのインストール, 3-3
複数のネットワーク・カード, 2-12
複数の別名を持つコンピュータ, 2-13
ループバック・アダプタ, 2-13

は

ハードウェア要件
Oracle HTML DB, 2-3
ハード・ドライブからのインストール, 3-3
ハード・ドライブへの DVD のコピー, 3-3
パスワード
Oracle HTML DB の不明瞭化, 4-12
「セキュリティ」も参照
レスポンス・ファイルに対する指定, B-2
バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC), 3-10
パッチ
HTML DB のためのダウンロード, 4-2
Oracle Companion CD のためのダウンロード, 4-2
Oracle Workflow のためのダウンロード, 4-2

ひ

非対話型インストール
エラー, E-4
非対話型の Oracle Workflow 構成, B-7
非対話型モード
エラー処理, E-4
概要, B-2
使用する理由, B-3
「レスポンス・ファイル」、「サイレント・モード」も
参照, B-2
表領域, 変更, 3-14

ふ

ファイル, Oracle Universal Installer ログ・ファイル,
E-2

複数の別名, コンピュータ, 2-13
複数の別名を持つコンピュータ, 2-13
複数のホームがあるコンピュータ, インストール, 2-12
プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC), 3-10
プライマリ・ネットワーク・アダプタ
 確認方法, 2-13
 「ループバック・アダプタ」、「ネットワーク・アダプタ」も参照

へ

別名, コンピュータに複数, 2-13

ほ

ポート
 Oracle HTTP Server
 範囲とプロトコル, D-3
 変更, D-4
 Oracle Ultra Search, 範囲とプロトコル, D-4
 Oracle Ultra Search, 変更, D-5
 Oracle Workflow
 範囲とプロトコル, D-3
 変更, D-4
 アクセス URL, D-2
 アプリケーション用に構成, D-2
 デフォルトの範囲, D-1
ホスト名, インストール前に設定, 2-13

ゆ

ユーザー名
 WK_TEST, 5-6
 WKPROXY, 5-6
 WKSYS, 5-6

よ

要件
 HTML DB の Web ブラウザ, 2-3
 Oracle Database 10g Companion Products, 2-6
 Oracle Database 10g Products, 2-5
 Oracle HTML DB, 2-2, 2-5
 Oracle HTTP Server 要件, 2-4
 Oracle Text の要件, 2-4
 Oracle XML 要件, 2-4
 ディスク領域, 2-3
 Oracle HTTP Server のディスク領域, 2-10
 既存の Oracle ホームでの Oracle Workflow, 2-9
 新規 Oracle ホームでの Oracle HTTP Server, 3-6, 3-15
要件, ハードウェアおよびソフトウェア, 2-11
抑制モード, 「非対話型モード」を参照

り

リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-4
リモート・インストール, 3-4
リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-3
リモートの Oracle データベース
 Oracle HTML DB のインストールおよびアップグレード, 4-12
リリース・ノート, 1-2

る

ループバック・アダプタ
 Windows 2000 でのインストール, 2-14
 Windows 2003 でのインストール, 2-16, 2-17
 Windows XP でのインストール, 2-16
 「ネットワーク・アダプタ」、「プライマリ・ネットワーク・アダプタ」も参照
インストール, 2-13
インストールされているかの確認, 2-14
概要, 2-13
削除, 2-18
必要なとき, 2-13
複数の別名を持つコンピュータ, 2-13

れ

レスポンス・ファイル
 companionCD.db.rsp, B-4
 companionCD.midtier.rsp, B-4
 htmldb.HTMLDBONLY.rsp, B-4
 htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp, B-4
 Oracle Universal Installer による指定, B-6
 一般的な手順, B-3
 エラー処理, E-4
 概要, B-2
 記録モード, B-5
 コマンドラインで値を渡す, B-2
 作成
 記録モードの使用, B-5
 テンプレートの使用, B-4
 自動ストレージ管理 (ASM), B-3
 セキュリティ, B-2
 パスワード, B-2
 「サイレント・モード」、「非対話型モード」も参照, B-2

ろ

ログ・ファイル
 Companion CD, E-2
 Oracle HTML DB, E-2
 Oracle Universal Installer, E-2
 非対話型, E-4